
ようこそパチンコへ

えんぴつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ようこそパチンコへ

【Nコード】

N4757E

【作者名】

えんぴつ

【あらすじ】

庶民がささやかな夢を託し興じるパチンコ。そこにはさまざまな人間模様、人生劇場があります。各話、大なり小なりパチンコがからんで来ますが、テーマは人間の喜怒哀楽。笑いあり、涙ありの短編集です。

第1話 黄色いランドセル

今年もまた、桜の季節がやってきた。

ピカピカの一年生たちが、これまたピカピカのランドセルを背負って、元気いっぱいに通学路を飛び跳ねている。

毎年、そんな微笑ましい光景を目にするたびに、オレの心はチクリと痛む――。

今年、娘は24歳だからもう18年も前のことだ。

真つ赤なランドセルを楽しみにしていた娘に、オレは黄色のランドセルを買い与えた。

箱を開けて、なかから黄色いランドセルが出てきたときの娘の驚きと落胆の表情をいまでも忘れることができない。

「やだ、赤いランドセルじゃなきゃ、ゆかは学校行かない。エ、ン、エ、ン」

「ばつかなあ、みんなと同じ色じゃ目立たないだろ。大体、赤は止まれの色だからな、パパ、好きじゃないんだよ。ゆかには止まらないでドンドン成長してほしいから。な、その点、黄色は注意の色だ。注意深く慎重に人に騙されることなく生きてほしいって、パパの願いが込められているだよ。黄色、すてきじゃん」

「やだ。全然、ステキじゃない。エ、ン、エ、ン」

その隣りでは、お袋が呆れていた。

「そんなわけの分からないこと言って……なんで黄色なんて買ってくるんだい」

そう言つて、オレを睨んだ。

「うるさい。オレの子なんだからオレの好きなように育てるんだよ」
オレはお袋を怒鳴りつけると、そのままパチンコに行った。

女房は娘が4歳のときに男をつくつて家を出ていった。

それからオレときたら、なにもかもイヤになり、仕事も辞め、昼はパチンコ、夜は酒に溺れる日々だった。

かわいそうだったのは幼い娘だ。

女房が出て行つてからというもの、「ママ、ママ……」と泣き叫んではお袋を困らせていた。

そんな生活が2年ほど続き、どうにかそれでも落ち着いてきた頃の話だ。

すっかりおばあちゃん子になっていた娘は、おばあちゃんに赤いランドセルを買ってもらう約束をして、それをとても楽しみにしていた。

それを飲んだくれのパチンコ親父がいきなり黄色いランドセルを買

ってきたのだから、娘が納得しないのも無理はなかった。

オレはオレでムシャクシャしていた。

オレだって好き好んで黄色いランドセルを買ったわけではない。

できれば真っ赤なランドセルを買ってあげたかった。

が、パチンコで使っちゃったものはしょうがない。

あの日、お袋が風邪ぎみだったので、「じゃオレがランドセル買ってくるよ」と、お袋から3万円を預かってデパートに行った。

3万円で赤いランドセルはいくらでも買えた。

が、5万円を超すブランド物のランドセルを見たオレはどうしても娘にそのブランド物のランドセルを買ってやりたくなくなってしまった。

母親がいなくて不憫な思いをさせている娘に、せめてランドセルだけでもいい物を持たせて、小学校に通わせてあげたかった。

入学式では、友達はみんなきれいに着飾った母親と一緒にいることだろう。

でも、娘はおばあちゃんだ。

「お前、どうしてママじゃないの?」。

子供の言葉は残酷だ。

きつと、そんなことを言われて、娘は傷付くに決まっている。

そんな娘にひとつでも自慢できる物を持たせてあげたかった。

それがブランド物のランドセルだった。

くだらない考えなのは分かっていたが、とにかくオレはそう考えた。

せめてものオレの親心だ。

そうと決まれば、所持金が足りない。

ならばパチンコで増やす一手だ。

オレはすぐさまデパートを出て、近くのパチンコ店に駆け込んだ。

なあにフィーバーすればすぐにブランド物だ。

フィーバー、フィーバー。

3万円はなくなった。

真つ赤なランドセルが買えずに真つ青になったオレは、急いで働いていた（といっても休んでばかりいたが）ペンキ屋の親方の家に行つて、なんとか1万円を前借りし、ディスカウントショップでいちばん安いランドセルを買ったのだった。

そう、1万円で買ったのは当時、出始めの奇抜な色のランドセルだけだった。

特に黄色は人気がなかったのか、3月も押し迫ったこの時期、半額以下で投売りをしていたのだった。

色なんかこの際、選んではいらなかった。

もちろん、娘はイヤイヤながらその黄色いランドセルを背負って小学校に通った。

お袋は「こんな色のランドセルでいじめられるんじゃないのか」とずいぶん心配していたが、たくましい娘は最初のうちこそ泣きながら帰ってきて、「黄色なんてひとりもない」と駄々をこねたものの、ひと月もすれば友達もたくさんできて、いつしかランドセルの色なんか気にしないようになっていった――。

24のいまとなつては、我が家の懐かしい笑い話だ。

それでも、オレの心にいまでも鮮明に残っている傷であることは間違いない。

こうして桜の入学式の季節になると、オレは真新しいランドセルを背負って行き交う新人生のチビッコを見るたびに、その傷が疼く。

そういえば、娘とオレで、家具屋に学習机を買いに行ったときも、娘は本棚が付いたキャラクター物の学習机を欲しがったが、オレは

頑なに「そんなゴテゴテした机ダメ。シンプルが一番」と言い張り、安い掘り出し物の机を買って、娘をがっかりさせたつけ。

予算はちゃんと5万円あったんだよ。

お前の母親の実家からお祝いが届いていたから。

でもパチンコで……。

「父さんは、お前の大切なお金でパチンコして、いつも負けてばかりで……」

「いいんだよ、父さん。もう、そんな昔話は……」

オレの目の前には娘が正座している。

「そういえば、中学の修学旅行のお小遣いもあげられなかったなあ」

「うん、父さんがやっぱりパチンコしちゃって……」

「あれも、父さんはお前に肩身の狭い思いをさせちゃいけないと思つてさ、確か小遣いは1万円までという決まりだったのに、3000円しかなかったから、父さん、増やそうと思ってな。そしたら3000円なんてアツという間だった」

「うん、父さん、私のためになんかやってくれと必ずお金減らしちゃうんだよね」

「高校の入学金にするためにお袋が積み立てていて貯金も使ったっ

け」

「私が高校卒業して、働き出して、コツコツためた貯金も使っちゃったよね……」

自分が情けなくて、娘を見ていられなくなった。

「でも、母さんは私から逃げちゃったけど、父さんはずっと私のそばにいてくれたもん。それだけで……それだけで……、エーン、エーン……」

明日、嫁ぐ娘は、幼い頃と同じ無邪気な泣き声で泣いた。

オレの目からも、涙がとめどなくあふれた。

本当に、こんな親なのにいい娘に育ってくれた。

そこに預金通帳片手にお袋が血相変えて飛び込んできた。

「ないないない、私の貯金が100万円、引き落とされている、ひひひ」

え？ それはオレ知らない。

オレじゃない。

まさか……。

「だってさあ〜結婚資金足りなかったんだもん。いいじゃん。か

わいい孫のために使ったってさ」

こいつは間違いなくオレの娘だ。

第2話 ジグソーパズル

期待に胸ふくらませていたはずのキャンパスライフ。

でも、私は変われなかった――。

内気な私は、田舎の小学校、中学校、高校で、ずっと“暗い”というレッテルを貼られ、それを自ら剥がすこともまま成らないまま、本当に笑顔のないつまらない時間に耐えてきた。

もうたくさんだった。

ここから抜け出したかった。

それにはこれまでの私のことなどだれも知らない東京へ行くしかない。

そこで私は自分を変えるんだ。

って、なに？ いまの生活。

念願の東京の大学に合格し、夢だったひとり暮らしをはじめて1年。

見事に私の大学デビュー作戦は失敗してしまったわ。

大学では友人と呼べるような人はひとりも出来ず、じゃあバイト先で見つけようと思って何ヶ所もバイト先を変えてみたけど、だーれも私になんか話かけてなんかくれない。

気が付けばプチ引きこもりよ。

まだ家族としゃべれただけ実家にいた方がましだったわ。

今週、しゃべったの何回かな。

お母さんとケータイで2回話して、コンビニのレジでお釣が少なかったから「すいません。100円足りないんですけど」って言ったのが1回。

あとテレビに突っ込みを入れたのが5、6回かな。

私の口、ホントに言葉を忘れてしまいそう。

そんな私の楽しみは、たまに行くパチンコとひとりの長い時間を埋めてくれるジグゾーパズル。

パチンコは、とりあえずひとりで時間を過ごしている人がこんなにたくさんいるっていうことが実感できるから好き。

みーんな、ひとりで台に向かって黙々と打っている姿を見ると、いまひとりぼっちなの私だけじゃないんだって思える。

できれば毎日ずっとパチンコ店にいて、その安心感に浸っていたいくらいなんだけど、貧乏学生的身ではそうもいかない。

月に2、3度行けばいい方かな。

勝てば毎日でも行きたいんだけどね。

やっぱり負けることの方が多いし。

だから、私の退屈な時間の使い道はもっぱらジグソーパズル。

好きな音楽を聴きながら、来る日も来る日もせっせとジグソーパズルのかけらとにらめっこして、時間が過ぎるのを待っているんだ。

大学に入った時は、これから勉強と遊びとバイトで忙しくなるぞおって思っていたのね。

でも、すぐに暇している自分に気が付いて、特に夜なんかなーんにもすることないの。

まあ、それで、ジグソーパズルに行き着いちゃったというわけ。

ちょうど殺風景な部屋の壁になにか飾りたいとも思っていたし。

初めて買ったジグソーパズルは、白い子犬のかわいいヤツ。

ちょうど新聞紙を半分に折った大きさの300ピースだったわ。

それでも初めてのジグソーパズルだったから苦労したなあ。

ジグソーパズルの基本中の基本の、端から作るってことも知らなくて、一生懸命、子犬の目や口の部分をたくさんピースの山からひとつずつ探してはめ込んで行ったっけ。

ほら、ジグソーパズルって、やったことある人なら分かると思うけど、1つのピースの4辺すべて凸凹があって、それをはめ込んで行くでしょ。

でも、一番外側に来るピースだけは1辺が直線なの。

しかも4ピースだけある角の部分は2辺が直線。

だから、まずたくさんのピースの山から直線があるピースだけ選び出して、それで先に外枠を作ってしまうのが完成への早道。

そんなことも知らなかったから、子犬の顔から作り出して、たったの300ピースだっていうのに3日もかかったのを覚えている。

特に子犬の部分はみんな白で、背景の芝生はみんな黄緑だったから、色による違いがなくて難しかった。

そっかあ、こういう単純な絵柄の方が難しいんだあって、ちょっぴり後悔しながら作ったなあ。

でも、最後の1ピースをはめ込んで完成したときはうれしかった。

私の日常には滅多にない達成感があって、思わず「やったー!」って、珍しくちょっぴり声を張っちゃって、自分でも驚いたもん。

それで病みつきになっちゃったの。

お給料日や親からの仕送りが来た日、パチンコで勝った日は、必ず新しいジグソーパズルを買うようになって、半年くらいで完成した

ジグソーパズルを飾る壁がなくなっちゃったほど。

大きさも3000ピースからはじまって500ピース、1000ピース、2000ピースと大物に手を伸ばして、いま作っているのなんて5146ピースよ。

サイズは縦108センチ、横147センチ。

1万2000円もしたんだから。

って、自慢すればするほど、みんな引くよね。

チャラチャラ遊びたい盛りの女子大生が、ひとり部屋にこもって、部屋の半分くらいを占領するような大きなジグソーパズルを黙々と作って喜んでいるなんて。

暗すぎる〜。

でもね、毎晩、眠くなるまでずっと途方もない数のピースの山とにらめっこして、少しずつ、ホントに少しずつ、画が完成していくのがたまらなくうれしいの。

私の大好きなアルプス山麓の風景画なんだけど、これが出来たら他のジグソーパズル壁から外して、ドーンと飾るんだ。

大体の目安は、3000ピースで1カ月、5000ピースだと3ヶ月って感じらしいけど、私は3000ピースなら3週間ほど、今回の5000ピースも2ヶ月半でそろそろ完成しそう。

で、ついにやってきました完成の日。

ホントは昨日がんばれば仕上がっていたんだけど、どうしても完成記念パーティーがしたくつて、残り300ピースくらいになったところでやめておいたんだ。

お風呂に入って、ビールを冷やして、大好きなケーキも用意して、さあ、いよいよ完成よ。

パチッ、パチッ、パチッ。

なんか完成させるのもったいないなあ。

湖のところも山の雪のところも苦労したっけ。

パチッ、パチッ、パチッ。

あと50ピース。

あと30ピース。

なんかドキドキしてきた。

あと10ピース、あと5ピース。

3、2、1……。

あれ、え、うそでしょ。

なんで？

な、ない。

ないないない。

最後の1ピースがないわ。

部屋中いくら探してもない。

どうして？

最初から？

え――。

もーなんなのよ、私って。

私の人生って。

友だちできないのは私の性格にもきつと問題があるんだろうから、
こうやってガマンしているわ。

でも、いいでしょ、私のささやかな楽しみぐらい思うように運んで
くれたって。

なんでないのよー最後のひとつが。

メーカーに言えば、すぐにその1ピースを送ってくれるのは分かっているけど、私はなんだかどうでもよくなってしまった。

なにもかも、アホらしくなった。

いつつもなにかが欠けてて、笑顔になれない自分が。

無気力になった私は未完成のジグゾーパズルをそのまま放置し、3、4日、フテ寝した。

そして、どうにでもなれと自棄になってパチンコに行き、「どうせ全部負けるさ、負けちまえ」と自虐的にパチンコ台に向かった。

案の定、おサイフのお金はみるみる減りつづけた。

と、パチンコ玉がひとつ、ポロリと落ち、私の足元へ。

感触からしてジーンズの裾の折り返しに入り込んだらしい。

身をかめて取ろうとしたら、そこに「あつた〜!!」。

ジグゾーパズルの最後の1ピース。

ウソ。こんなところに入り込んでいたのかあ。

と同時に、パチンコ台が輝きだした。

え、当たった、当たった、パチンコも当たった〜。

と喜んだのもつかの間、結局、玉は全部なくなり、家に帰ると、部屋は泥棒に荒らされていた。

5000ピースのジグソーパズルは見るも無残な姿に……。

いまなら私、死ねるわ。

第3話 転落

「お義父さんのお兄さんの長男の結婚式？ そんな遠い親戚の結婚式に俺が出るの？」

「だって、ぜひみなさんでって、言ってくれてるんだって」

「え？ みなさんって、まさかウチのチビたちもか？ 4人で？」

「そうよ。なんかお嫁さんの親族の方が多くて、つりあいが取れないらしいわ」

「なんだよ、それ。人数合わせの動員かよ。4人で行ったら5万でも少ないくらいじゃないの。お前ひとりなら3万で済むのに」

「そうなのよ。私の親は10万包むらしいんだけど、ウチも4人で行くなら7万は包まないって。ほら、一流ホテルでやるから」

「な、ななまん？ ウチのひと月の生活費じゃん。冗談じゃないよ。大体、俺の方の親戚じゃあ、甥っ子や姪っ子の結婚式なんて呼ばれたことないぞ。せいぜい俺の親までだよ、出席するのは。そんなのまで出てたら、金がかかってしょうがない」

「そんなこと言ったって……」

とまあ、いろいろ反論をしたところでムダなことは結婚して4年、俺はイヤっていうほど分かっている。

甥っ子の結婚式の話を持ち出した時点で、妻はすでに行くことを決

定しているんだから。

俺にできることといったら、ご祝儀の額をなにがなんでも5万に抑えることぐらいだ。

案の定、俺は「5万ならいい」と渋々、承諾するしかなかった。

それから2カ月近くが過ぎ、いよいよ式まで5日に迫ったある朝、妻はどうやって少ない俺の給料からへそくっているんだか、5万円を俺に手渡して、これを銀行でピン札に替えて来てほしいと頼んできた。

そして俺はその5万円を財布に入れ、会社の昼休み、銀行でピン札に替え、折れないようにカバンに大事にしまった。

別になんてことはない簡単な用事だ。

いや、そのハズだった。

その日の帰り、俺はいつものようにパチンコをした。

そして、いつも以上に熱くなって、気が付いたら小遣いの3万円を見事に使い切っていた。

スツカラカンになっちまったら仕方がない。

後は帰って寝るだけだ。

が、俺は思い出してしまった。

カバンに5万円があることを。

もちろん、手を付けちゃいけない金だつてことは重々承知している。

けど、熱くなつた俺の頭は、「いくらなんでも、この台はもう出る。800回もまわっているんだぜ。確変まちがいない。あと3000円だけ……」といい方にいい方に考え、「なあに、出れば問題ないだろ。ちよつと借りるだけだ」と、躊躇なくカバンの封筒を取り出し、1万円札を台間玉貸し機にすべり込ませていた。

そして気が付いたら、店内に蛍の光が流れていて、ピン札は1枚に減っていた。

やっちまったー！

夜の街に出て我に返つた俺は、頭を抱えた。

さあ、どうする？

カードで借りるか？

いや、もう限度額ギリギリだもんなあ。

じゃあ消費者金融しかないか？

それもなあ。

第一、妻に給料を握られていて、返済するあてがない。

それだけでなくカードローンの返済だって、妻に隠れて四苦八苦し
ているっていうのに。

結局、まだあるピン札1枚に望みを賭けることとなった。

「あなた、銀行で替えて来てくれた？」

ほら、早速おいでなすつた。

「いや、今日は忙しくて、行く暇がなかった。結婚式まででいいだ
ろ？」

明日、パチンコで勝てばすべては丸く収まる。

なんとしても勝つんだ。

しかし、正直、1万円では心もとない。

俺はカードローンでホントに限度額いっぱいとなる1万5000円
を借り、計2万5000円で勝負することとした。

頼むッ！ 出てくれ！

って、頼んで出てくれたらだれも苦労はしない。

信頼度の高いスーパーリーチにも見放され、虎の子の2万5000
円は無情にもすべて飲み込まれていった。

さあ、今度こそどうしよう。

事態は最悪だ。

消費者金融しかないか。

しかし、なんで俺が、会ったこともない妻の甥っ子の結婚式に出席するために、消費者金融に借金までしなきゃいけないんだ。

仮病でも使うか。

いや、もうそんな段階じゃない。

俺は間違いなく妻から5万円受け取っているんだ。

たとえ式に出なくても、5万円は妻に返さなきゃいけない。

じゃあ、やっぱり消費者金融か。

なら、金利がもつたいないから、ギリギリに借りた方がいいよな。

俺ってこんな切羽詰った状況でも我ながら冷静だなあ。

なんて言っている場合か。

来年30になるっていうのに、5万ぐらいでこんなにオタオタして情けない。

毎晩、妻の「銀行行ってくれた？」という質問を、「だから忙しいんだってば。金曜日までには行くから」と逆ギレぎみに誤魔化し、いよいよ結婚式の日が近づいてきた。

俺は消費者金融で借りるつもりだった。

が、金曜日の会社の帰り道、数ある消費者金融の看板を見ながら、どこに入るか決めかねていると、フイに悪魔が俺の頭に巣食ったんだ。

「5万も借りて、返せるのか？ カードローンに消費者金融。自己破産への道、まっしぐらだな。一家崩壊、離婚。甥っ子の結婚式に出るために？ ふん、バカバカしい。人がいいにもほどがあるぜ……」

俺は悪魔を振り払うことができず、覚悟を決めた。

カラのご祝儀袋を出してやれと。

ご祝儀袋にお金を入れ忘れたっていう話は、実際たまにあるようで、親しい人なら先方も入ってなかったと言えるが、それほどでもない相手には恥をかかせることにもなるので言えないらしい。

もしかして、なにも言っ来ないかも知れない。

言っ来たとしても、笑えるミスってことで済むだろう。

その時は消費者金融に行くしかない。

そんなバカなことと思うだろうが、人間、追い詰められると、そん

なバカなことが平気でできてしまうもんだ。

「おい、ご祝儀袋はもう書いてあるのか？　どれ？　俺が持っていないから」

妻はまさか夫がそんなみつともないことを企てているとは思っていないから、俺にご祝儀袋を手渡した。

それに俺は5万円を包んだフリをして、礼服の内ポケットにしまった。

さすがにその夜、なかなか寝付けなかったが、もう後戻りはできない。

俺は布団の中で一端の詐欺師にでもなった気分で、翌日のイメージトレーニングを繰り返し返した。

なあに、堂々とカラのご祝儀袋を受付に出せばいいだけだ。

仮にバレても、入れ忘れを咎める人など妻以外にいやしない。

大体、式場で中身のチェックなどしないだろう。

バレるとしたら翌日か。

当日、俺は受付で堂々とカラのご祝儀袋を手渡し、新郎新婦に「お幸せに」「おめでとう」と笑顔で声をかけたりして、できるだけ自

然に振舞った。

とはいえ、小心者の俺がこの罪悪感に耐えられるはずがない。

披露宴の間中、いつ、「あのー、お金が入っていませんでした」って言われるか、まったく生きた心地がしなかった。

当日でこんなにツライなら、バレル確率が高まる明日以降は家の電話が鳴るたびに心臓が止まるかも知れない。

第一、妻に知られたら、即座に5万円を出さないと入れ忘れたという言い訳が成り立たない。

仕方がない、明日、消費者金融に借りに行こう。

そして、妻に「入れ忘れた。カバンの中に入ってた」とウソを付いて、5万円渡そう。

そうすれば、この針のムシロから解放される――。

翌日、俺は消費者金融に飛び込み10万円借りた。

え？ 5万円多いつて？

いやまずパチンコで取り返さなきゃ。

今度こそ勝つぞー。

第4話 パパの本音

「パパ〜っ。やったよぉ〜」

台風が首都圏に上陸し、バケツをひっくり返したような雨の中、ずぶ濡れになってやっと我家に到着した俺が、玄関のドアを開けると、娘がものすごい勢いで走ってきて、いきなり飛びついてきた。

あー、もう、ムカツクなこのバカ。まとわりつくんじゃねーよ！

と本心では思っても、そこはやさしいパパだ。

「あーだめだめ、まみまで濡れちゃうぞお」

「ね、聞いて、聞いて、まみの絵がまた入選したんだよ。すごいでしょ、パパ〜」

人の話を聞かないのはママ譲りだ。

え、いまなんて言った？

入選？

うわ、またかよ。

それを聞いた俺はさらに不機嫌になったが、

「そっか。すっごいなあ」

と娘に微笑みかけ、とにかく風呂に入った。

それにしてもなんであんな絵が入選しちゃうんだろう。

湯船に浸かりながら、俺は怒りすら覚えていた。

その絵とは女の子が土手を歩いているところを描いた絵で、ウォーキングの団体かなんかが募集した絵のコンクールに娘は絵画教室を通じて出品していたのだった。

いや、上手ならいいんだ。

でも、絵心のない俺でも、顔の半分が目で、手足が棒のようにまっすぐで細いマンガみたいな女の子が、ただ土手を歩いているだけのだれでも描けそうな塗り絵みたいなヘタクソな絵がどうして毎年、入選しちゃうのか不思議でならない。

よっぽど作品が集まらないのか。

まったく迷惑な話だ。

娘は4歳から絵画教室に通っている。

3歳くらいからお絵描きが好きで、放っておけばひとり静かに落書きばかりしていたんだけど、それを妻が親ばか丸出しで「この子には絵の才能がある」なんて褒め続けたもんだから、娘もその気になって絵画教室に通いだしたんだ。

俺も、まあ習い事のひとつくらいはいいだろうと、その時は大したこととは思わなかったんだけど。

それから3年が経ち、いま娘は小学2年生。

「やっぱり女の子はピアノくらい習っていた方がいい」ということで、小1からピアノを習いはじめ、

「字もきれいな方がいい」と習字もはじめ、

小学校の算数の授業でちょっと引き算を間違えて来ると「落ちこぼれたら大変」と学習塾に通わせ、

「近所のだれちゃんもう泳げる」ということでスイミングスクールにも通っている。

今年の春、恐る恐る妻に聞いたら、娘の習い事の月謝だけで月々4万5000円だった。

どっひゃー。

俺の小遣いは3万円だっていうのに。

いや、これは月々の月謝だけの話で、このほかにピアノの発表会ともなればレースのワンピースやピカピカの靴など衣装代もかかるし、出演させてもらうためには参加費も1万円かかる。

さらに頻繁に行われるピアノの先生のコンサートには義理で観に行かなきゃいけないし、花束だって渡さなきゃいけない。

大体、我家の狭いリビングにやって来た態度のでかいピアノが70万円だと知らされたときは、脳震盪を起こしそうになった。

そうそう、先月は習字のコンクールにも入選して、その展示用に半紙を掛け軸のようなものに飾らなければいけないと言われ、その代金も1万円かった。

なんやかんやすべて含めたら、娘の習い事に毎月いくらかかっていることやら。

しかも、恐ろしいことに我家にはもうひとり息子がいる。

もうすぐ4歳になるから、そろそろ習い事適齢期だ。

このまま息子にも娘と同じように習い事をさせたら月謝だけでも2人で月9万円。

いくら家計は妻に任せているとはいえ、俺の給料手取り30万ちょっとで毎月9万も教育費を支出していたらどうなるかぐらい火を見るよりも明らかだ。

呆れた俺は妻に娘の習い事を減らすように言った。

すると妻は「せっかくまみだつて喜んで通っているのに。お金のためにやめさせるだなんて。あの子には才能があるのよ。その芽を伸ばしてあげるのが親の務めじゃないの？ それをあなたは…う、う…まみがかわいそう…」だって。

才能？

一体あのマンガみたいな絵のどこに才能があるんだ。

4年通って、あんな絵しか描けないなんて絵画教室の先生にも問題あると思うけど、なにより娘の絵の才能のなさをしっかりと証明してくれているじゃないか。

しかし、泣きじゃくる妻にそんなことを言えるわけがない。

俺はたくさんの言葉を飲み込んで、「分かった。俺がバリバリ働いてなんとかするから」と言うほかなかった。

寄りに寄って、その絵が入選とは。

ホント、勘弁してほしいよ。

しかも去年もそうだったから分かるけど、このコンクールで入選すると、都内のデパートに展示されるから、それを家族4人で観に行つて、さらに後日、都内のなんとかホールで表彰式があるから、それにも行かなきゃいけない。

2日つぶれて、その交通費、食費ほか出費もバカにならない。

風呂から出た俺は、不機嫌なままりビングに行つてビールをあおつた。

妻は「ほら、やっぱりまみは才能あるのよ。2年連続入選なんてすごいって絵の先生も褒めてくれたのよ」と上機嫌。

ケツ、あの先生は褒めるのが仕事なんだよ。

どうせ去年と一緒に同じ教室の子供たちはみんな金賞とか銀賞もらってるんだろ。

入選なんて一番下の賞じゃないか。

俺には参加賞を言い換えているとしか思えない。

でもまあ、娘も妻も喜んでいるのに、いま俺がここでイチャモン付けて、ムードをぶっ壊すのも大人気ない。

俺はジッとガマンし、「よかったなあ」と娘の頭を撫でてやった。

そこに息子がクレヨンもってやってきて、画用紙にグニャグニャ線を描きながら、「これ機関車トーマス!」と連呼。

妻が目を細め、「あー、上手ねえ。まみと一緒に才能あるかも」ね、あなた、そろそろかずきも4歳だし、絵の教室に行かさないかね」なんて恐れていたことをついに口に出した。

行かさないとなって、いつから絵の教室が義務教育になったんだよ。

俺が黙っていると、妻が信じられないひと言を浴びせてきた。

「あ、そうそう、あなた、かずきも習い事はじめるようになったら、悪いけどパチンコはやめてね」

え？

俺の唯一の楽しみまで奪うのか。

「俺の小遣いの範囲で楽しんでいるんだから、家計には迷惑かけてないだろ」

俺がちょっと反論すると、妻はこともなげにこう言っただけだ。

「だって、あなた、パチンコの才能ないじゃない」

そりゃあ、俺には博才なんてないよ。

でも、レジャーなんだからそれでいいじゃないか。

本人が楽しければ。

それより俺のパチンコの才能を云々言うなら、その前に娘の才能をしっかりと見極めろって。

あの絵のどこに才能が感じられるんだよ。

ピアノだって発表会でミスだらけだったし、学習塾に行ってもこの前の学校の算数のテスト25点だったぞ。

水泳だって1年以上通って、まだ10mも泳げないし。

なんてひどいことを本人を前にして言えるわけがない。

結局、俺は「分かった。要するにお金の問題なんだから、俺ががんばってなんとかするよ」と言うしかなかった。

それにしても俺、最近、家でも会社でも本音をしゃべったことないなあ。

第5話 娘の就活

「なに、パチンコ店だって。ダメだ。絶対に。なに考えてるんだおまえは！」

ひとり娘の朝海が、こともあろうにパチンコ店を経営する企業に就職すると言い出した。

「だから、ちゃんと私の話も聞いてよ。」

お父さんが考えているような昔のパチンコ店とは違うのよ。

いまはしっかりとした企業なんだって。

私のゼミの2年先輩がその会社に就職してて、責任ある仕事をどんどん任されているの。

おしゃれなお店を企画したりして、すごくやりがいがありそうなの。

ねえ、お父さん、ちゃんと聞いてってば！」

なんで、4年制の大学まで出て、パチンコ店なんだ？

5年ほど前の就職難の頃ならいざしらず、今年はバブル期に匹敵するほどの売り手市場で、いくらでも企業を選べるらしいじゃないか。

それなのに、うちの娘は、なんでパチンコ店を選ぶんだ？

どんな思いで大学まで行かせたと思っているんだ。

あー聞かない、聞かない。

そんな話、聞きたくない。

「とにかく、父さんは、絶対に反対。よく考えるんだな」

「父さんの分からず屋。もう、いい」

そう言うと、朝海は2階へ上がったきり、夕飯の時間になっても下りてこなかった。

早くに妻を亡くして、男手ひとつで育てて来た朝海に、不憫な思いだけはさせまいと、父さん、いままでがんばって働いてきたんじゃないか。

父さん、なにも朝海に押し付けたりしたことないぞ。

ただ、普通に就職して、結婚して、幸せな家庭を築いてくれればそれでいいんだよ。

パチンコなんかダメだ、パチンコなんか……。

その晩、俺は痛飲して、いつの間にか居間で寝ていた。

朝、起きると、タオルケットが掛けられていた。

朝海だ。

こんなやさしい自慢の娘が、なんでパチンコ店なんだ？

二日酔いでガンガンする頭の中は、それでも朝海の就職のことについてばいだった。

テーブルの上には「父さん、お願いだから私の話を聞いて。もう内定ももらっているの。私、絶対にこの会社で働きたい！」と朝海の手紙が置いてあり、その横には朝海が就職したいというパチンコ店の会社案内があった。

なーにが、内定をもらっているだ。

当たり前だろ、パチンコ店が俺の自慢の娘を落とすわけがない。

内定なんて、出て当然なんだよ。

そんなもんをありがたがるなつて。

逆だよ逆、父さんはパチンコ店なんか朝海がもつたいないって思っているの。

パラパラとその会社案内をめくって見ると、確かに最近のパチンコ店はおしゃれで豪華で規模が大きくて、俺が若かった頃のパチンコ店とは比べ物にならない。

そんな最新鋭の店舗を首都圏に20店舗もチェーン展開しているらしく、売上げのグラフも右肩上がりだ、まだまだ不況から抜けきれ

ない俺の会社より、会社の規模も将来性も格段に上を行っている感じだ。

だけど、パチンコだもんなあ。

親ならだれだって反対するよなあ。

朝海との気まずい日々が1週間ほど続いたある日、近所に住むお袋が遊びに来た。

母親がいなかった朝海はおばあちゃん子で育ったため、なにかあるとすぐにお袋に泣きつく。

俺を説得するようと、朝海が呼んだのだった。

その晩、お袋の手料理を3人で囲んだ。

「ねえ、おばあちゃん。父さんに言つてよ。父さんったら、まったく聞く耳もたないんだから」

お袋がお茶をすすりながら、静かに話し始めた。

「これは、息子のおまえにも話したことないけどさ、実は私と父さん、パチンコ店で知り合ってたんだよ」

げっ、マジ？ なんじゃそりゃ。

「私の家、貧しくてね。それでパチンコ店に住み込んで、裏回りつ

ていう仕事をしてたんだよ。18の頃かなあ」

お袋は、昔を懐かしむように時々、目を閉じたり、遠くを見たりしながら、当時の話を語り始めた。

俺にとっては両親の、朝海にとっては祖父母のラブストーリーなわけ、こっちとしても興味津々。

俺と朝海はお袋の話に聞き入った。

なんでも、昔のパチンコ店には、まだ補給という機械がなく、パチンコ島の中に女の子が入って、各台に玉を補給していたらしい。

それが裏回りという仕事で、玉が出ないと当時の荒っぽい客に怒鳴られたり、台を叩かれたり、蹴られたり、そりゃあ18の乙女にはおっかない仕事だったようだ。

「毎日、朝から晩まで狭い島の中にいて、重い玉を台の上タンクに入れるんだ。もう夜になると手が上がらなくなってるね。」

閉店後も玉を磨くんだけど、これも重労働で、ほんと、毎晩、寮の布団に入って泣いてたよ。

でも、お給料がよかったから。実家に送金もしてたしね」

「おばあちゃん、苦労したんだね」

朝海がしんみりと言った。

「なあに、苦労だなんて。そういう時代だったんだよ」

そんなある日、ガラの悪い客が執拗におばあちゃんを怒鳴って、脅した。

「出玉が少くねーだろ、おら、なにやってんだよ、このグズ。出て来い、バカヤロー」

恐る恐る台の上から顔をのぞかせると、あろうことかパチンコ玉が飛んできて、おばあちゃんの眉間を直撃した。

こんなトラブルの時は、すぐに男の店員が助けに入るんだけど、この時は違った。

近くにいたお客がすぐに、その乱暴者を外に出し、ボコボコにくれたそうさ。

もう、それからはおばあちゃんは、その男にホの字で、玉が入賞しなくても玉を出してあげたりして、付き合いが始まった。

それがおじいちゃんというわけだ。

「ふーん。馴れ初めがパチンコだったとはね」

「で、おまえが生まれて、おまえが結婚して朝海が生まれた。

おまえが世間体とかいろいろ気にして反対する気持ちも分からなくはないけどさ、

私がパチンコ店で働いてなければ、おまえも朝海もこの世にいなかったわけだから、

そんなにパチンコを毛嫌いするのもねえ。

いいんじゃないの、朝海はしっかりしたい娘なんだから、そんなに心配しなくても」

んー、両親の出会いがパチンコだったからって、娘がパチンコ店に就職するのを認めるっていうのも、なんか違うと思うけど、でもまあ、この雰囲気じゃ俺だけ反対してもなあ。

「なんかしつかりした会社みたいだし、朝海がそんなに働きたいなら、許すしかないか」

「いいのね、父さん。ありがとう、おばあちゃん。

でも、おばあちゃん、かわいい。

片思いの彼に時々、玉を出してあげてたなんて」

「そうかい。でもね、後からおじいちゃんに聞いたたら、私はまんまと騙されてたんだよ」

おじいちゃんは当時、町のチンピラで、弟分をわざと暴れさせ、裏回りのおばあちゃんに近づいたらしい。

その罫にまんまとハマったおばあちゃんは、おじいちゃんにいいように利用されたのだった。

「もういまじゃ時効だけどね。」

支配人にバレルまで、半年ぐらい出しまくったよ。

あと出る台を教えて、おじいちゃん仲間が入れ替わりで打ち止めにしたりね。

その儲けたお金でおじいちゃん、中古のトラック買って、足を洗って、私と所帯を持ったんだよ」

「お、おばあちゃん、そんな話をしたら、父さん、また反対するでしょ。」

いまはそんなお店ないよ。

全部、コンピュータで管理されているし。

時代が違うつて。もう父さん」

「ダメ、絶対に反対！」

ていうか、俺の父親、そんなヤツだったの？

そっちの方がショック。

第6話 母の秘密

「あなた、最近お義母さんの様子がヘンなのよ。
毎日9時ごろになるとイソイソと出かけて。

わたしが『どちらにお出かけですか?』って聞いても、
『ちょっとお友達のところへ』っておっしゃるだけで」

「いいことじゃないか。

父さんが死んでずっと籠もりつきりだったんだから。

お前も一日中、家で一緒に息が詰まるだろ」

「そうですね。

だけど、ちゃんとおしゃれしてお化粧もして、
ほんとに楽しそうに出かけるんですよ。

どんなお友達かと思って・・・」

「あはは。なにを心配しているんだよ。

まさか、あの歳で男ってわけもないだろ。

あ、いや、待てよ。

最近では高齢者の恋愛っていうのも増えているらしいから、

まったくない話じゃないなあ。

でも、それはそれでいいんじゃないのか。

再婚なんて話になったら別だけど」

「とにかく、それとなくお義母さんにあなたから話をしてくださいね。

どこに出かけているか分からないんじゃない、急な連絡の時に困るし、

第一、出先でなにかあったら心配ですから」

ぼくの母さんは、今年で65歳。

一昨年、父さんが脳溢血でこの世を去ってから、

半年くらいは仏壇のある自分の部屋に籠もりつきりで、

ずいぶんと心配をさせられた。

それから徐々に立ち直ったかに見えたけど、

それでも父さんのいるころのあの明るく元気な母さんとは程遠く、
抜け殻のようだった。

20歳で結婚して40年以上も連れ添った生涯のパートナーに先立たれた淋しさは、

そんな大きな別離を経験したことのないぼくには分かりようもない。

元気のない母さんが気にはなっていたけど、

結局は妻がそばにいたことだし、

ぼくは仕事が忙しいのをいいことに、

母さんのことを妻に任せっきりにして、

いつの間にか“元気のない母さん”がぼくのなかで当たり前になっていった。

おばあちゃんなんだから、そういうもんだと。

その母さんが、最近変わったらしい。

確かに朝、出勤前にぼくが朝食を食べていても母さんが庭に水を撒いたり、

ちょっとぼくに話し掛けてきたり、

夜もぼくが晩酌をしているとその隣りで中学生の孫とふざけていたり、

ずいぶんハツラツとしてきた。

父さんが亡くなって2年が過ぎ、ようやくショックから立ち直りかけているのかな、

それならよかったと思っていたけど、そうかあ、茶飲み友達ができたのかあ。

妻が言うには、毎日出かけるようになったのは、ここひと月ほどのことらしい。

だからまだ、家族にも内緒にしているのか。

ま、家族に知られるのが照れくさいという気持ちも分からないじゃない。

どれ、ちょっと母さんの部屋に行って聞き出してみるとするか。

「母さん、最近、毎日、出かけているんだって？」

「おや、どうしたんだい。お前がわたしの部屋に来るなんて珍しいね」

「いや、ちょっと。最近、母さんが楽しそうだから、なにか趣味でも見つけたのかなあと思ってさ」

「ああ、趣味ね、ま、趣味といえば趣味だね」

「なにを始めたの？」

「楽しい〜こと！ でも、家族には内緒っ」

「なんだよ、そう言われると余計に聞きたくなるじゃないか。仲のいい友達でもできたの？」

「友達？ ああいっぱいできたよお」

「お茶？ 俳句とか？ それともダンスか。おしゃれしてゲートボールってことはないよなあ」

「さあ、なんでしょう。あはは、だから秘密だつて。」

ささ、もうわたしは寝るんだから出てっておくれ」

結局、最後までではぐらかされて、母さんの秘密を聞き出すことはできなかった。

それでも、母さんとのこんな明るい会話は久しぶりのことだった。

このことを妻に話すと、

「だから、出先でなにかあったら心配だから、どこに出かけているのかくらい聞いてって言ったのに」

と不満顔だったけど、

「母さんは秘密も楽しんでいるんだからさ」と、

ぼくはこの話をそれで打ち切ろうとした。

が、「お年寄りを狙った靈感商法とか詐欺まがいのセミナーとか、いろいろあるのよ。」

いいことって淋しいお年寄りに取り入って。

大丈夫かしら、お義母さん……。」という妻の言葉でばくも心配になり、

妻に母さんの後を尾けさせることにした。

翌日、会社に出社したばかりのぼくの携帯に妻から電話が入った。

「あなた、お義母さん、どこに出かけていたと思う。」

わたし、もうびっくり。

パチンコ屋さんなのよ。

それも店の前の行列に並んで。

恥ずかしくて、恥ずかしくて。

帰ったら、お義母さんにちゃんと行ってくださいよ」「

母さんがパチンコ。

あの、母さんが。

妻が驚くのも無理はない。

いやぼくだって信じられない。

パチンコとか競馬とかそういうものを一番、毛嫌いしていたはずの母さんが。

ぼくの父さんと母さんは中学の教師だった。

だから躰も厳しく教育熱心で、なにより世の中のルールには人一倍うるさかった。

小学校のとき、友達と下校途中に駄菓子屋で買い食いしたのがバレて、

こっぴどく叱られたのを今でも覚えている。

友達がみんな、酒やタバコを覚え、バイクに乗り、

彼女とデートし、パチンコや麻雀で遊んでも、

ぼくはエロ本さえ満足に見たことのない高校生だった。

それもこれもみんな母さんが厳しく目を光らせていたからだ。

そしてマジメだけが取柄の大人となったぼくは、同じようなマジメな妻と結婚した。

パチンコを「恥ずかしい」と思うマジメな妻と。

その母さんが、まさかパチンコとは。

にわかに信じられないぼくは、会社を早退し、そのパチンコ店へ行くことにした。

そこで見た母さんは、実に楽しそうに笑っていた。

あんなイキイキとした母さんの顔は、もしかしてぼくは初めて見たんじゃないだろうか。

隣りの同年代の女性と談笑しながら、慣れた手つきでパチンコ玉を玉箱からすくっては補充している。

「あ、ほら、リーチだよ、リーチ」

「あ、ほんとだ。今度は来るかしら。がんばれ、がんばれ。あ、またダメだわ」

「あははははッ」

反対隣りには、缶コーヒーを3本持った学生風の男がやってきて、母さんと隣りの女性に缶コーヒーを渡しながら、

「角の台、空いたよ。移った方がいいんじゃないの」と話し掛けた。

母さんは、その孫のような若者とも知り合いなのか、

コーヒーの代金を渡しながら

「そんなこと言って、この台で出されちゃアツタマきちゃうもんね
」

と冗談を飛ばし、また笑った。

ぼくは、そんな母さんに声を掛けることをやめ、そのまま店を出た。

あんなに毛嫌いしていたパチンコだもんなあ。

家族に言えるわけないか。

正直に言つと、もっとほかの趣味の方が息子としてはうれしい。

でも、あんなに楽しそうな母さんの姿を見たら、近所に恥ずかしいからやめてとも言えない。

父さんと自分の年金で小遣いも潤沢で、お金でぼくに迷惑をかける

こともないんだから、別に問題もないし。

楽しい趣味と仲間ができて、母さんの第二の人生が明るくなったんなら、いいことづくめじゃないか。

ぼくは自宅にいる妻に電話をした。

「母さんの秘密、もうしばらく秘密にしておこう。楽しそうだからさ」

第7話 ソウさん

その女との出会いは、パチンコ店だった。

おれがいつものように会社帰りにパチンコを打っていると、左隣の席にその女は座った。

歳は30ちょい前くらいか。

黒いレザーのミニスカートに模様の入ったストッキング、長いブーツを履いていた。

細くきれいな脚を組むと、当然、太股がさらに上までおれの視界に入ってきて、

1箱飲まれて退屈していたおれの関心は、

モニターよりも左斜め下の彼女の股間に注がれることになった。

それから10分ほど経っただろうか。

彼女はハンドバッグからタバコを取り出すと、

おれの前に無造作に置かれていた百円ライターを「あ、借りるね」と言ったと同時に使った。

おれの返事も待たずに。

ん？

図々しい女だなと思ったが、まあライターぐらいはなんでもない。

それより、これがキツカケになればと思って、

間を置かずにすぐに何かを話しかけようとおれは言葉を探した。

ここよく来るの？

調子はどう？

仕事帰り？

きれいな脚だね。

いくつか浮かんだ言葉は、どれも相手の関心を得ることも、

会話を広げることもできそうになく、

で、結局、面倒なのでおれはそのままパチンコにまた没頭することにした。

しばらくして女は席を立ってしまった。

その翌日、またおれの左隣に女が座った。

その時点では、おれは、その女が昨日の女だとは分からなかった。

が、またまた、いきなりおれのライターを使ったので、

それでおれは昨日のことを思い出し、

その女の顔を見て、ああ、昨日の女だと分かった。

「こんばんは。今日も来ていたんだあ」

女から話しかけてきた。

「うふふ、今日、美容院に行ったからわたしだって判からなかったでしょ？」

へ？

突然、この女はなにを言いだすのだろう。

ただハンドルを握ってモニターを見るだけの作業で止まっていたおれの脳細胞が、

グルグルと回転をはじめたが、

おれはこの状況が理解できないまま、

それでも女からのアプローチを無駄にしてはいけないという結論に達し、

ちよつと間を置いてから笑顔で、女に話しかけた。

「ああ、昨日も隣にいたよね。」

よく来るの？ 勝っている？

昨日、あれからその台、ちょっと出たよ」

しかし、その女はおれの言葉にはなんの反応も示さず、正面を向いたまま、こう言った。

「わたし、パチンコ嫌い。うるさいし、髪にも服にもタバコの匂いが付くし……」

うーん、なんだ、この女は。

ちょっとあぶないなあ。

相手にしない方がいいかな？

でも、黒いロングコートの前が割れ、そこから覗く黒いストッキングに包まれた脚は捨てがたい。

ま、だめ元で誘ってみるか。

「ぼくもそろそろやめて、食事でもしようかと思っていたんだ。

夕飯まだでしょ？ よかったらごちそうするよ」

さあ、この女はどんな風に返してくるのか？

「わたしをそんな軽い女だと思った？」

そうきたか。

うゝん、軽そうだけどな。

ま、イヤならいいか。

「いや、ひとりで食べるのも淋しいからさ。イヤならいいんだ」

おれは、こういう気まずい雰囲気には耐えられないから、

2箱分の玉を特殊景品に替えて、店を出た。

すると、その女が店の前でおれを待っていた。

「いいわよ。付き合っただげる。キミ、いい人そうだから」

キミって、どう見てもおれの方が年上なのに……。

ま、いいか、とにかく誘いに乗ってきたんだから。

それにしても、変わった女だ。

おれは下心というより、この女に興味を持ちはじめていた。

一体、どういう女なんだろう？

居酒屋のテーブルに向かい合って座ったおれたちは、

適当につまみを注文し、焼酎のお湯割りを飲みはじめた。

さて、たくさんある疑問をどこから聞いていこうか。

が、ここまでずっとこの女のペースなんだから、

やはりここでも会話のペースは彼女が握った。

「昨日も今日も夜、ひとりでパチンコなんてキミ、淋しいのね」

う、確かに言われなくても淋しい。

しかし、遠慮のない女だ。

「キミってなにをしている人なの？ 結婚はしてないよね。彼女もいないの？」

な、なんなんだ、もしかして英会話のテープとかなんかの資格とか、その類のセールスか？

一方的に失礼な質問攻撃にさすがのおれもむかついてきた。

「あれ？ ちょっと怒った？」

短気なんだね。わたし、短気な男って苦手。

自信がないから余裕がない。

余裕がないから、女にもやさしくできない……

違う？」

カーッ！

その前にお前に常識があるのかよ。

勝手に人のライター使って、付いてきたと思えば好き勝手なことをほざいて。

見ず知らずの人間にこんなこと言われたら、だれだって怒るわ。

「ちょ、ちょっと待ってよ。なんかおかしくない？ 一体なんなの？」

「うふふ、ごめんね。でも、これがわたしの性格なの。

思ったことは考えないで口にしちゃうの。

あなた血液型は？

Bかあ。B型の男とはわたし合わないのよねえ」

いや、こんな女、合わなくていいや。

それよりサッサと帰ろう。

このままじゃ血管がブチ切れる。

「ね、なんでわたしを誘ったの？ 簡単にできると思った？」

わたし、こう見えても堅いのよ、うふふ」

うふふじゃねー。

確かに下心があつたのは認めるよ。

でも、なんだこの女。

じゃ、この女の目的はなんだ？

なんでおれに話しかけてきた？

なんで誘いに乗った？

「自分だつて同じだろ？」

女ひとりで夜パチンコして、

しかもおれに話しかけてきて、

美容院に行ったことを言う相手もいないくせに。

こうやって知らない男に付いてきているのはだれだよ」

「そうよ。

こんなことしてたらいつか殺されちゃうって友達にも脅かされるの。」

でも、男と話してないと、わたしダメなんだ。

根っからの男好きの淋しがり屋で。

別にエッチがしたいとかじゃなくて、こうやって話しがしたいの。

だめ？」

は？

なんか拍子抜けするような理由だった。

おれの怒りは呆れて一気に収まり、今度は「だめ？」っていう甘い口調に、

愛しさまで感じてしまった。

おれと同じで淋しいんだもんなあ。

かなりコミュニケーションの取り方はヘタだけど、

それを受け入れたら案外、いいヤツなのかも知れない。

「今日、寒かったから、いま毛糸のパンツ履いているんだ。

最近かわいいの流行っているんだよ。

後ろにクマさんの絵が描いてあるのとか」

酔ってきた彼女は、男の下心をムクムクとさせることを言い出し、酔いも手伝って、おれも下ネタで応酬して、場が盛り上がってきた。さて、それじゃあクマさんでも拝ませてもらおうか。店を出て、おれは彼女の手を握った。

「な、なに、なにするの？　だめだってば。わたし……」

イヤがる彼女を強引にホテルに連れ込み、スカートをめくると、

確かにお尻にはクマさんの絵があつた。

しかし、前にはゾウさんが……。

第8話 時代

いまでも月に1、2度はパチンコに行くけど、

それにしてもパチンコがおもしろくなかったのはどの位前からだろうか。

今日、ちょっと熱くなって3万5千円も負けたから言っんじゃないが、

ホントにパチンコがつまらない。

どれもこれも大きな液晶をドーンと盤面中央に組み込んで、

違いと言えばそこに映し出される画像だけ。

ただクルクル絵柄が回転し、

時々、キャラクターが飛び出して来てスーパーリーチに発展し、

そこから絵柄が揃うか、揃わないかだけの遊び。

メーカーが変わっても、機種が変わっても、内容はどれも一緒だ。

私に言わせれば、こんなモノはパチンコじゃない。

パチンコ玉は飛ばしているけど、内容はスロットマシンで、

そこにテレビゲーム的な演出を施しているに過ぎない！

あれ、そう言えば、パチンコが大好きだった祖父も同じようなこと
言ってたなあ……。

その昔、パチンコに電動ハンドルが現れた当初、

私の祖父も「こんなモノはパチンコじゃない」とよく言ったものだ
った。

確かに、驚くほどのスピードで寸分たがわず同じ場所にピタリと玉
を打ち続けられる腕を持ったプロまたはセミプロたちにとって、

素人との力の差を一番見せつけることができる玉を打つという技術
介入の部分を機械化されてしまったのは、

これはもう別の代物。

例えるなら、弓矢が鉄砲を通り越して一気にマシンガンに変わった
ようなもので、

プロと素人の力量に関係なくだれでもハンドルさえ握れば一定のス
ピードで連続して玉が打ち出されていくのだから、

そこに腕の違いは皆無となった。

蒸し暑い夏の日の夕方、祖父はステコー1丁で縁側に陣取り、

当時、中学生だった私を話し相手にビールを飲みながら

「ただハンドル持っているだけじゃ、つまらなくていけねーや。

パチンコはよ、親指で1発1発、心をこめて打つからおもしろいのよ」

とよくグチったものだ。

そんな祖父に私は、

「なんで？　ラクでいいじゃん。玉がすぐなくなっちゃうのは困るけどさ」

なんて反論していたっけ。

庭先には小学生の弟や妹が観察日記を付けるために植えたひまわりが、

大人の背丈ほどに育って、

祖父の顔よりも大きな黄色い大輪の花をいくつも咲かせていたのを、なぜかいまでも鮮明に覚えている。

それから電動ハンドルは、祖父のよく行く店の総台数の2割、3割、半分……

と徐々にその勢力を拡大していき、

数年後ついには全台がそれに取って代わった頃に、

祖父は天寿を全うした。

そんなパチンコ好きの祖父に連れられ、

小さい頃から景品目当てでパチンコ店に出入りしていた私は、

小学校の高学年にもなると

祖父の横でいっぱしのパチンカー気取りで玉を弾いていたものだ。

だから、祖父は私に電動ハンドルのことをグチったし、

私も反論なんかできたのだった。

当時はパチンコ店も大らかだったのか、

子供の私が1台占領してパチンコをしても従業員に注意された記憶はない。

逆にチョコをもらったり、ひと握りの玉をもらったり、

なにかにつけかわいがってもらったほどだ。

こんな環境で育った私にパチンコをやるなというのがムリな相談で、高校時代にはひとりでパチンコ店に入り浸っていた。

オールドファンの祖父にとっては腕の見せ所を奪った憎き電動式ハンドルも、

私がひとりで本格的に打ちはじめた頃にはそれが当たり前だから、パチンコはそういうモノというだけのこと。

祖父にとってはパチンコじゃないパチンコが、私は楽しくて仕方がなかった。

いま、30年のパチンコ歴を振り返ると、

この頃のパチンコが一番、パチンコらしくて楽しかったように思う。

いまのように攻略本もなければ、インターネットのホームページもないから、

メーカー名や機種名なんかはさっぱり覚えていないが、

それでも夢中になった機種はいまでもハッキリと覚えている。

私が一番、好きだったのはオリンピックの表彰台を模した機種だった。

センター役物のなかに表彰台があり、
天穴から入った玉は、1位、2位、3位の表彰台にある入賞口のい
ずれかに入る仕組みだった。

チューリップは左右に2個ずつ、

役物下に上下2個（下のチューリップから玉を入れ、次に上のチュ
ーリップに入れば再び下のチューリップが開く）の合計6個で、

一番低い3位の表彰台に入れば、左右の2個が、

2位の表彰台に入れば役物下の2個のチューリップが開き、

見事てっぺんの1位の表彰台に入賞すればチューリップが6個全開
となる。

天穴から玉が入って、見事てっぺんの表彰台に玉が入ったときには、
盤面上に一度に6個のチューリップが花開き、それはそれはうれし
いものだった。

ツイているときなど、1位に入って、チューリップが6個開き、
そのうちの2、3ヶ所のチューリップに同時に2個入賞して再び開
き、

さらにひと通り入賞したと思ったら、

最後にセンター役物下の上のチューリップに2個同時に入って、

それもまた下からちゃんと閉じたりして、ガッツポーズものだった。それで得られる玉数なんて、いまのパチンコの大当たり1回分とは比べ物にもならないが、

再抽選で確変が来たときよりもよほど胸がスカッとしたもんだ。

あと、忘れられないのが、長い刀を両手に持ったコミカルな侍がセンター役物だった機種。

通常時は、センター役物から伸びた2本の細長い刀は幅1センチの間隔で並び立ち、天穴まで届いている。

それがひとたび、玉が天穴に入賞すると、その侍の持つ長い刀がゆっくりと左右に開き、

大入賞口になるのだが、

その大きさをや大胆にも盤面の左右ほとんどの幅にまで広がってしまうから、

どこに玉が流れても、入賞してしまうというスグレモノ。

もちろん一定時間で閉じてしまうが、

あの開口時の入賞口サイズはいまだに破られてはいない記録じゃないだろうか。

このほかにも、アイデアに富んだ個性的な機種はいくつもあった。

新台オープンの告知があると、

今度はどんな機種が入るのかとその日を待ちわびたものだ。

ホント、あの頃のパチンコは良かった――。

「大体な、いまのパチンコのルーツはフィーバーなんだけど、

あれはパチンコでスロットマシンを作ったものなんだよ。

で、パチスロはパチンコ型のスロットマシンだろ。

じゃあ、いまのパチンコ店は全部スロットマシンが並んでいるってことじゃないか。

パチンコはどこに行ったんだよ、まったく……」

私がかつての祖父と同じようにマンションのリビングで

第3のビールを飲みながら息子にグチると、

「はあ？ フィーバー？ なにそれ？

てゆーか、パチンコでもスロットでもよくない？

連チャンして儲ければ」と息子が反論してきた。

テーブルの上には妻がカルチャースクールでこしらえてきた

白い小ぶりのひまわりのフラワーアレンジメントが飾られている。

祖父なら間違いなく

「ふざけちゃいけねーや。」

こんな白くて小さい花のどこがひまわりなんだい」

って、巻き舌で怒ることだろう。

そして私もいまなら

「そうそう。」

見上げるほど高くて、

大きく黄色い花を太陽に向けてこそのひまわりだからね」

と、追隨するに違いない。

第9話 爆発

朝、目覚めると、一緒の布団に寝ている女房が気づいたのか、

寝返りを打ってわたしに尻を向け、

爆発音のような屁をした。

昨晚、わたしの給料明細を見て、

さんざん不満をぶちまけた彼女は、

まだその怒りを引きずっている。

だから「今朝は朝食の準備なんかしませんよ」

という意思表示の屁だ。

まあいい。

不機嫌な女房に嫌味を言われながら、

晩飯の残りを食わされるよりは、

立ち食いそばの方がどれだけうれしいか。

それにしても、よくまあタイミングよくわたしが起きたと同時に寝返りを打って、

大きな屁ができること。

結婚前は小さなおならが出ちゃうと、消え入るように顔を赤らめていたのに。

それから10年、女房に感心させられることといえば、

マシンガンのようなテンポでわたしをなじることと、

いつでもどこでも屁ができるようになったことくらいだ。

もっと、わたしにメリットがあることで感心させてほしいとつくづく思う。

さて、爆発音のような屁で布団から出たさわやかとは縁遠い朝は、

せめてひとりでゆっくりと紅茶でも飲んで出社するとしよう。

わたしは紅茶を用意し、タバコをくゆらせながら、

新聞を開いた。

なになに、花火工場で火薬が爆発して作業員3名が重軽傷。

こういう職場での事故のニュースを見るたびに、

被害者である本人もそうだが、

一家の大黒柱が倒れて、その家族はどんな気持ちなんだろうかと思う。

わたしだってセールスマンで1日中、クルマの運転をしているのだから、

いつ事故を起こすか、あるいは巻き込まれるか……。

今日も1日安全運転を心がけよう。

そうだよなあ、健康でこうやって元気に働いていることが幸せなんだ。

ウチの爆発おなら女房も、そういうこと考えないのかなあ。

考えたら、爆発おならはしないか。

かえって、労災が入っていいわねくらい考えかねないから恐ろしい。

立ち食いそばを食べるため、いつもより早く家を出ると、

外は4月だというのに雪がちらついていた。

どおりで寒いわけだ。

わたしは、こりゃあったかいそばがうまいぞと、

凍結している道路を急いで、駅前の立ち食いそば屋の自動ドアをあけた。

すると、いきなり怒鳴り声だ。

「まったく、昨日の遅番はあつたまきちゃんよー!」

「かきあげ、これじゃ全然足りないよお。」

あ、お客さんてんぷらそばないよ、だめ」

一瞬なにを言われたのか分からなかったが、どうやらそういつことらしい。

それならそれで自動券売機の「てんぷらそば・うどん」を

売り切れにしておけばいいのと思ったが、

まあ油っこいのも控えた方がいい歳だし、

月見そばの券を買って、

わたしはその券をカウンターの上に置いた。

カウンターの中のパートのおばさん2人は、

忙しく手を動かしながらも、

それ以上に口を動かし、

昨日の遅番の準備の悪さを罵倒しあっていた。

「この前も店長に言ったんだよ。朝は忙しくてそれどころじゃない
って」

「だめだめ、あの店長は遅番の上島さんには妙にやさしくって。狙
ってるんじゃないの」

「どっこがいいんだろ、あんな女の」

「とにかくがまんできないよ。店長に文句言って、それでも直らな
かったら辞めてやる」

「じゃ、一緒に辞めようよ。あたしたち2人が居なくなったら、困
るのは店長なんだから」

「あんたも辞める？ あっはっは、おばさん2人がキレたら怖いこ
と思ひ知らせてやろうね」

店長も大変だ。

不満を爆発させたおばさん2人に責められる店長を想像して、ちょ
っと同情。

ま、これから朝のミーティングで、所長の雷が落ちること確実のわ

たしが

他人に同情なんかしている余裕ないんだけど。

「てめえ、なに触ってんだよ。やらしいな。

みなさん、こいつはチカンです。

てめえ、次で降りろよ」

怒りを爆発させているのは、いかにもおっかなそうな女子高生。

やり込められているチカンの容疑者は30代の会社員風で、

最初はポカーンとしてたが、

女子高生の剣幕に縮こまってしまっていた。

事の真相はわたしには分からないが、

とにかく満員電車では両手を高く挙げておくことだ。

李下の冠。

瓜田に履を納れず。

できるだけ相手の感情を爆発させないように生きていかなきゃ。

わたしはそうやって40年間、生きてきた。

だから女房の爆発おならにだって平常心でいられる。

わたしから見れば、満員電車で両手を挙げていないなんて自殺行為に等しい。

「ばっかやるー!!」

てめえは毎日、毎日、どこほつつき歩いてるんだよ、この給料どろぼー!!

おい、説明しろよ、安藤さん」

「はい、すみません」

「すみませんじゃ分かりませんよ、安藤さん。

ちゃんと耳はあるんですか？

どうやったら一ヶ月まじめにお客さんの家を訪問して、

ひとつも商品を買らないなんて難しいことができちゃうんですか？」

「……」

「おい、なんとか言えよ。」

まわってねーんだろ。

お客の家をよお。

仕事を舐めるなよ。

てめえは今日売って来なかったらクビだからな。

次、ああ、田中さんもがんばって遊んでくれたねえ。

たったの3つ。

揃いも揃って、この営業所の営業マンはやる気があってうれしいね。
」。

所長のわたしは涙が出るよ、このボンクラども！」

女房のマシガンのようなわたしをなじるときの言葉にも感心するが、

さすがに所長はプロだ。

10人の営業マンを前に延々2時間、

この調子で売上げ不振の不満を爆発し続けた。

売上げゼロの安藤さんのおかげで先月よりは標的時間が少なくて済んだが、

わたしが『がんばって遊んでいた』田中だ。

先月は『一生懸命遊んでいた』田中だった。

その前は確か『がむしゃらに遊んでいた』田中だ。

来月わたしはどんなに風に遊んでいるのか、かなり楽しみだ。

さてと、それでは所長の期待を裏切らないように遊ぶか。

わたしは社を出ると、パチンコ店の駐車場にクルマを入れた。

昨日突っ込んだ台をやるために。

が、1万円入れてもかからなかったので、

女房に内緒で借りている消費者金融に行って3万円借りた、

それをもう1万円だけ突っ込んで、

それでもだめで諦め、

仕方なく午後ちょっとだけ仕事をして社に戻った。

もちろん、売れない。

そして同僚たちに誘われていつもの居酒屋へ。

「まったく、あの所長はおれたちを人間扱いしてない。早く辞めてえなあ」

「売れるわけないって、あんな商品。だれが30万も出して買うよお、この不景気に」

「てめえで売ってみろってんだ！」

今日売ってこないとクビと言われて、

やっぱり売って来なかった安藤さん以下、

わたしも含めて営業成績の下から4人が集まった。

そして酒が入るにしたがって所長や仕事に対する不満が爆発していった。

みんな青筋立ててがなり立て、ストレスを発散している。

もつとも、わたしは聞き役専門で、感情をあらわにしたりはしない。

無駄なエネルギーは使わないことだ。

重い腰の3人を残して、わたしは夜、またあの台をやりに行った。

サイフには1万5000円。

そして、それが消えた。

「パチンコは爆発しないか……」

爆発台と書かれたプレートに一瞥して、わたしは大通りに出た。

そして、歩道の前後に人がいないことを確認してから、

精一杯の大声を張り上げた。

「うおおおおおおおおおおお！」

第10話 甲斐性

金が欲しい。

とにかく金が欲しい。

金さえあれば。

あゝ金、金、金……。

去っていく谷口くんの後ろ姿を未練たらたで見送りながら、俺は心底そう思った。

金あれば、いまごろ谷口さんとホテルであんなことしたり、こんなことしたりできたものを。

あー金だ、金。

世の中、金だ。

金がなきゃなんにもできない。

今日は職場で寿退社をする社員のための送別会だった。

その飲み会で派遣社員の飛び切り美人の谷口くんが、

こともあるうちに俺にびたつとくつついて離れない。

潤んだ瞳で、

「係長、2次会は2人だけでしましょう」

なんて言い出して、

またそのちよつと酔った顔のきれいなこと。

もう、行く、行く、どこへでも。

って、ノドまで出かったけど、

俺、金持っていないんだよね。

金は全部、女房に管理されてて、

今日の送別会の会費の5000円だってやつともらえたくらいなんだから。

35にもなるいい大人のくせに、いまサイフの中は3000円しか入ってない。

これで2人でどこに飲みに行けっというのよ。

立ち飲みだつて計算しながら飲まなきゃなんない。

ましてやその後、ホテルなんてなったら……。

でもさ、俺も男だから、まさかお金がありませんとは言えないですよ。

一応は上司なわけなんだから。

だから、色っぽい瞳で見つめられても、

俺は「女房が待っているから……」なんていかにも愛妻家を装って、ふくれて帰る谷口くんを見送るしかなかったわけ。

あーもつたいない。

あんないい女から誘われたっていうのに。

家に帰ると、女房は寝ていた。

いや、正確には俺がドアを開けて帰ってきた気配を察して、寝たんだろう。

帰宅時間のチェックだ。

起きているなら布団から出てきてもよさそうなもんだが、どうせ機嫌が悪いのだ。

大した稼ぎもないくせに飲んで帰ってくる俺が許せないに違いない。そんな金があるなら、我が家には欲しい物がたくさんあるらしい。

それにしてももったいないことをした。

女から言い寄られることなんか結婚以来、はじめてのことだ。

そのせつかくのチャンスを俺は金がないばかりに逃してしまった。

それもそんな大金じゃない。

たかが2、3万の金さえあれば、それでどうにでもなったものを。

つくづく自分が情けなく思う。

大学を出て働いて13年にもなるっていうのに、

自分の自由になる金が一銭もないとは。

これじゃあいけない。

甲斐性が無いにもほどがある。

俺はぬるい風呂に浸かりながら股間のイチモツを見つめ、

こりゃ真剣にヘソクリを作らなきゃいけないなと思った。

でも、その方法となると、アルバイトは時間的にも肉体的にも無理だし、

ギャンブルはしょせんギャンブルだし、

宝くじなんて当たるわけがないし。

そう考えると俺の頭の中にはパチンコぐらいしか浮かばなかった。

パチンコなら独身時代にそこそやって結構、勝った印象ばかりが残っている。

それに月3万の俺の小遣いでなんとかヤリクリしながら

トライできるのもパチンコぐらいしかない。

そうか、パチンコか。

もちろんリスクは承知している。

でも、1回勝てば谷口くんを抱けるのだ。

たとえ負けて昼飯抜きになろうとも、男なら勝負するだけの価値はある。

谷口くんの裸を想像し元気になった股間に冷水を浴びせ、

俺は明日の勝負に燃えた！

翌朝、不機嫌な女房に「今日はよく食べるわねえ」と皮肉を言われながらも、

俺は食パンを3枚食べ、今日の勝負に備えた。

昼飯を抜いて、昼休みにパチンコをするためだ。

さすがに起き抜けに食パン3枚はきつかったが、

いま食べておかないと夕飯まで食べられないと思えば入るもんだ。

それにしてもたかがパチンコするために朝から食いだめしている俺
って一体……。

会社に行くと、若い社員が

「係長は48億円当たったらどうします？」と

スポーツ紙から顔をあげて聞いてきた。

なんでもラスベガスのカジノのスロットで

史上最高金額の48億円を当てた男の記事が載っているらしい。

こちらら2万、3万の金に困っているっていうのに、

いきなり48億円なんてとんでもない金額の使い道を聞かれたって
困る。

「そうだな、マンション買って、クルマ買って、家族で海外旅行で

もするかな」

そう答えると、

「係長、なに言ってるんですか、夢がないなあ。48億ですよ、48億。1億じゃないんですよ」

確かにそう言われればそうだ。

でも、48億あったら何をするって言われても、

せいぜい会社辞めて遊んで暮らすぐらいしか思い浮かばない。

「ぼくならそうだなあ、10億くらいの超高級マンション買って、毎晩、銀座や六本木で豪遊するかな。

キャバクラで気に入った女を片っ端からお持ち帰りして。

いいだろうなー。あーちくしょう。

口ト6の4億円でもいいからあたらないかなー」

なんだ、結局、そんなところか。つまんねー。

ま、そんな現実味のない話より、俺にとっては目の前の3万だ。昼、パチンコで3万稼いで、そんでもって谷口くんを誘うんだ。

そうそう、谷口くんはどうしてる？

いたいた。

いつもなら俺に笑顔で話し掛けてくれるのに、今朝は目も合わせようとしてくれない。

自分から誘って断られたから恥ずかしいのか。

それともいい女だからプライドが傷ついたか。

とにかく向こうが俺に好意を抱いているんだから、

俺から声をかければ問題ないだろう。

待つてろよ、パチンコに勝ったらすぐに抱いてやるからな。へへ。

さて、勝負するからにはまずは勉強。

俺は仕事そっちのけでパチンコ好きの部下に最近のパチンコについてレクチャーを受け、

準備万端ととのえて昼休みになったらパーラーへ駆け込んだ。

軍資金はたったの3000円。

サイフの中身が昨日から増えるわけがない。

はたしてこの3000円で揃ってくれるか。

部下に聞くまでもなく、3000円でパチンコするなんて無謀なのは分かっている。

が、俺に運があれば、神様が俺に谷口くんを抱かせてくれるなら、

そのくらいの小さな奇跡は起こってくれてもいい。

そしてその小さな奇跡は起こった。

諦めかけていた3000円めで確変が揃い、

それから5連チャンもしてくれたのだ。

換金したら2万5000円になった。

やった。

これはまじめに生きてきた俺への神様からのプレゼントだ。

生きててよかった。

谷口くんは俺からの誘いに驚いたが、喜んでOKしてくれた。

「好きなもの言つて。なに食べたい？」

考えてみれば女房以外の女とデートするなんて10年ぶり以上のことで、

そのうえ相手が美人の谷口くんとくれば俺も舞い上がる。

「じゃ、お寿司ごちそうになっちゃおうかな」

2万5000円あれば大丈夫だろう。

しかし、俺が当然のようにテーブル席に座ろうとしたのに、

谷口くんはカウンター席に向かってしまった。

カ、カウンターで好みか。

あ、いや、それはちょっと。

ホテル代に1万残すとしてここで使っているのは1万5000円まで。

ん、ちとつらいか。

でも、なんとか……。

「私、昨日、飲んだ勢いで勇気出して誘ったのに、

あ、私、大トロとウニとイクラください、

それなのに係長つたら……こない女に恥かせて。

もう遠慮しないで食べちゃおうと。

あ、アワビとぼたんエビも……」

もうホテル無理……。

第11話 罰当たりな男に罰

泣きつ面に蜂とはこのことだ。

鉄板と踏んだ競馬で10万もつていかれた帰り道、

少しでも取り返そうとスケベ心を出してパチンコに寄ったら

きれいにハマッて、残る5万もスツカラカン。

カーツとなって席を立ち、

一目散に店を出ようとしたら、

床に転がっているパチンコ玉に右足を滑らせて

「グギッ」だつて。

もう、足首が痛いなのって。

朝になつても腫れが引かないから病院に行ったら、

右足首の骨にヒビが入っているっていうじゃんか。

そんな訳でいま、俺は松葉杖のお世話になっている。

医者がいうには、ヒビは骨折よりも時間がかかるそうだから、

まあ当分は仕事も休んで、のんびり療養生活つてところなんだけど、なんせ昨日、有り金すべてをスツちまっているから、のんびりなんて気分には、ほど遠い。

とにかく先立つモンがなきゃ、こっちは餓死しちまう。

治療費も今日のところはツケだが、

明日は払わないとカッコ悪いし。

となると金策だが、親方はこの忙しいのにケガなんかしやがってって怒っているからペケ。

やっぱ、アイツしかいねえな。

「おお、俺だよ。まいっちまったよ。足、ケガしちゃってよお。

ちょっと食い物持って、来てくんねえかなあ。悪いけどよ。

あ、それから金もちょっと……」

「ツーツーツー」

なんだよ、バカヤロウ。

困っている時はお互い様だろうが。

無言で切ることはねえよな。

冷てえオンナだ。

ま、アイツの貯金200万もギャンブルに使っちゃまった俺が、

そんなこといえた義理じゃないか。

アイツが愛想を尽かして部屋を出て行ってから、かれこれ3ヶ月になるもんな。

もう新しい男でも出来たかもしれねえし。

でも、もう1回だけかけてみるか。

「おい、本当に困ってるんだよ。

病院代だけでも、なんとかならねえか。

5万、5万でいいからよ。

昨日からなんにも食ってねえんだ。

頼むよ、由美。由美様。3万。

俺、いま人生最大のピンチ。助けて。

一度は愛し合って、同棲までした仲じゃねえか。

なあ、ホント、助けて」

「いい気味よ。ばーか。ツーツー」

お、こりゃ脈がありそうだ。

ホントにイヤなら、まず電話に出ない。

それに、例え「ばーか」でも、とにかくしゃべった。

まだまだ甘いな、由美ちゃんよ。

それ、再ダイヤルと。

「なによ、何度も何度もうるさいわね」

「だからさ、頭を下げるのが何より嫌いなこの俺が、

こうして『助けてください』って、頼んでいるんだからさ。

お願い。今度だけ助けて。

俺、別れてから、お前になにか頼みごとしたことあるか？

な、ねえだろ」

「うーん」

よし、これは落ちる。

「このままじゃ、俺、世をはかなんで自殺しちゃつかもよ。

そうなりや、お前だっていい気はしないだろうが」

「なにそれ、脅迫する気。死ねるもんなら、死んでみなさいよ。

そんな度胸もないくせに」

「あ、そつ、じゃあな」

と、電話を切って待つこと1時間。

案の定、由美はスーパーの袋を抱えて、俺の部屋をノックした。

「久しぶり。どうでもいいけど、汚い部屋ね。よく病気になるいこと」

「その代わり、ケガした」

おもしろくないわよ、といわんばかりに由美は俺の軽口を無視し、

勝手知ったる元愛の巣に入ると、

矢継ぎ早にケガに至ったいきさつを聞いて来た。

「パチンコ玉に足を取られて、骨にヒビが入ったって？

バツカじゃないの。

散々、お金取られて、しまいに足までケガして、

いい笑いモンだわ」

「そこまでいうか。一度は愛した男に対して。

お前には情けってモンがないのか」

「あんたに対してはね。どうせ仕事もしないで、
相変わらずギャンブルばかりしてるんでしょ？

ああ、別れて正解だった。

今日は特別だからね。

もう2度と来ないから。

本当は顔も見たくないんだけど、

あの情けない声を聞かされたら憐れになつてさ」

よしよし、会話もいい感じで弾んで来たよ。

「まあまあ、来る早々、そんなに忙しく言い訳しなくても、

分かっているって、お前の本心は」

「ばか。勘違いしないでよね。

ふざけたこといってると、帰るわよ」

「分かった分かった。とにかくなんか作ってくれ。腹ペコなんだから」

口ではなんだかんだいいながらも、

由美は結構楽しそうに食事の支度をし、

テーブルの上を片付けて、料理を並べた。

ビールまで買ってきて来ている。

「あんたはダメよ。ケガしているんだから」

「いいじゃねえかよ。な、再会を祝してカンパーイ！」

「なんで祝さなきゃいけないのよ。」

あんたから電話が来るなんて、今日は仏滅なんじゃないの。

大体、私のお金200万も使っておきながら、

どのツラして電話して来たのよ。

図々しいったらありやしない。

私がこの3ヶ月、どんな思いでいたか分かっているの？

本当にあつたまに来る」

「痛え。ばか。蹴るなよ。ヒビ入ってるんだからよ」

「私の心のヒビに比べたら、そんなもん大したことないわよ。

男のクセに大げさね」

付き合っている頃も、こうしてよくじゃれ合ったもんだ。

「いや、でも、人間、元気な時はいいけどよ、

ちょっと体が不自由になると、弱気になるねえ。

松葉杖じゃ、なんにもできねえ」

「たく、相変わらず口ばかり。

あんたがケガしたの昨日でしょ？

たった1日でなに分かったようなこといつているのよ」

「いや、ホント。病院の帰り、松葉杖で電車に乗ったろ？

大変なんだから。

階段なんかどうしようかと思ったね。

でもよ、結構、親切な人っているのな。

俺が困っていたら、そいつ肩貸してくれてよ。

俺、ついでに金も貸してくれていいそうになっちまったぜ。ハハハ」

「キヤハハハ。このバチ当たり。

そんなこといっても、私は貸さないからね。

冗談じゃない」

お、ついに笑った。

「絶対に返すから。とりあえず明日、病院に今日の分を払わなきゃ。

8000円だったかな。

それと給料日までの生活費も。

な、5万でいいから、お願い。

天使のような由美様！」

「だゝめ」

言葉が甘くなつて来たよ。

「ところで今日はゆっくりしていけるんだろ？」

俺、淋しいからよ。

な、よかったら、泊まっていけよ」

「なにいつてるのよ。1回、家に戻って支度する時間もあるから、遅くても4時には帰るわよ」

「なんだよ、お前。久しぶりに会ったっていうのに、

それはないだろ。まあ、飲め飲め」

結局、由美はお店に「休む」と電話をした。

俺への恨みつらみを延々と口にし、

怒って、泣いて、

そしてヨリが戻った。

まさにケガの功名。

さすがの俺も、今度ばかりはマジで由美を幸せにするつもり。

こんなやさしいオンナは、ほかにいないと分かったからな。

これまでの分も幸せにしてやらないと。

なんて柄にもねえことを考えたのがいけなかったのか、

トイレまで片足ケンケンで行ったところが、

俺、酔っているから段差でグギッ！

左足もやっちゃった――。

第12話 拳式前夜

「ねえ、オヤジはどこ行ったの？」

シャワーを浴び、すっぱんぽんのままバススタイルで髪を拭き拭き、

居間に入って来た23歳の娘・美菜子が、テレビを見ている母親に聞いた。

「決まっているでしょ、パチンコに」

そんな非常識な娘の振る舞いに慣れっこの母親は、

「パンツぐらい穿きなさいよ」なんて無駄なことは言わず、

テレビを見ながら、面倒臭そうに答えた。

「げっ、マジ？ 信じらんない、だって、明日あたしの結婚式じゃ〜ん。」

なにそれ〜。超むかつく〜」

「別にお父さんには用ないでしょ」

「え〜、普通さあ、なんかないわけ？」

目の中に入れても痛くないかわいい娘が明日、嫁に行っちゃうんじやん。

『美菜子、ちょっとここに座りなさい』とか言っちゃってさあ。

最期のお別れっていうのかなあ」

「ばかね、それじゃお葬式じゃない」

美菜子がばかなことは、23年間見て来て、イヤというほど知っている母親だ。

でも、やっぱりガマン出来ずに、ばかという言葉が口をつく。

「大体、あんたのどこが、目に入れても痛くないかわいい娘なの。

中学で援交で補導されて、高校は薬で中退、20才でヤバンバギヤルになったかと思うと、

急に先月帰ってきて結婚するって……。

もう母さん、あんたにはどれだけ心配をかけられたか……」

「あー、分かった、分かった。だから、過去を振り返るなっば。

それより、もっと前向きに生きようじゃん」

田中家のひとり娘・美菜子は、近所でも評判のどうしようもない娘。

高校中退後、ほとんど家に寄りつかずプチ家出を繰り返し、

帰ってくるたびにその奇抜なファッションで両親を驚かせ、

泣かせ続けて来た。

ヤマンバギャルで帰って来た時と、

鼻にも舌にもピアスをしたパンク娘で帰って来た時は、

さすがの両親もわが子だとは分からなかったという。

そしてひと月前、実はこの時が両親を一番驚かせたのだが、

なんと東大卒のエリート商社マンを連れて帰って来て、

こともあるうちに、「この人と結婚します」と

両親の前でさも普通の娘っぽく頭を下げたのだった。

目が点とは、まさにこのことで、

両親とも固まってしまったのも無理はない。

が、その両親の反応を見た東大卒は、こりゃ反対されていると勘違いし、

「お嬢さんを必ず幸せにしますから、どうぞ結婚を許してください」と、

30分以上も座布団に頭を擦りつけて両親を説得したというから、世の中なにが幸いするか分からない。

とにかく、その日は丁重に東大卒にはお帰り願って、娘からことの詳細を聞いた。

「ったくさあ、一体なにが不満なわけ？」

結局、女なんていい男捕まえばいいんじゃない。

そのためにいい大学行って、いい就職して、花とか茶とか習ってさ。そういう武器がなんもなかったって、こうやって東大卒をみつけてきたんだからさあ、

感謝してほしいくらいだよねえ。

金のかかってない娘がサヨナラ満塁ホームラン打ったっていうのにさあ」

「確かに」

することはおバカで非常識だが、口だけは達者な娘に、早くもお父さんは納得。

「お父さん！で、どういう人なの、あの人は？」

美菜子に東大卒のエリートなんて。

騙されているんじゃないの？」

母親は当然の疑問を美菜子にぶつけた。

「ジョーダン。あたしは男を騙したことはあっても、騙されたこと
はないの。」

なんたつて、いままでいろいろ化けて来たからね、へへ。

まじめな東大卒なんかチョロイ、チョロイ」

「……じゃ、やっぱり美菜子のこと知らないんだ……」

母親の顔が曇った。

「なに、それ」。いまの美菜子も美菜子じゃ〜ん。

平気、ちゃんと高校中退って言うてあるし〜。

てゆうか、両親が病気であたしが学校辞めて昼も夜も働いて、

生活費と入院費を稼いだことになってるけど、きゃはは。

あいつ、涙流して感動してやがんの。

あれだね、東大卒も大したことないね。余裕〜」

これには、これまで美菜子に散々鍛えられて来た両親も顔を見合わ

せ、

深いため息をついた。

「やっぱり、そういうことが……」と。

そんなこんなであつという間にひと月が過ぎた。

明日が挙式ということは、こんな無理のある話が

あるうことかトントン拍子に進んでしまったということだ。

先方の両親もすっかり美菜子に化かされていた。

「オヤジ遅いなあ。じゃあさあ、ちよっくらパチンコ屋に行って呼んで来るからさ。」

まったく、挙式前夜に娘にやっかいかけるなっていうの。」

美菜子は、父を迎えにパチンコ店へと向かった。

「オヤジ、なにパチンコなんかしてんだよ」

「できればオールでパチンコして、明日の式にも出たくない」

「なに気張ってギャル語使ってるの。マジダサ。いいから、帰るっぜ」

「やだ」

「もしかして、あれ、意外に照れてるんじゃないの。」

ほら、娘のあいさつに涙なんか流しちゃったりしてさ……

きやはは、かわいい」

「あほか、おまえに対する涙はとうに枯れたわ。

間違っているよ、この結婚は。

中学で援交したお前が、いいのかヴァージンロードを歩いて」

「あ、それ差別」。

いいんだよ、金さえ払えばだれが歩いたって。

大体なんだよ、世間的に見れば見事に更生したヤンキー娘の感動の拳式じゃんよ。

紳助が泣くつちゅーの。

なんで親が素直に喜ばないかなあ」

「だって騙してるじゃん」

「真実を言えはいってもんじゃないだろ、世の中、え？」

「お前が親に、世の中を語るな」

「心配すんなよ。式が終わったらそのままドイツ暮らしなんだから。それより、明日はちゃんと演技しろよ。親の務めだかな」

娘が捨てゼリフを吐いて帰った後、父は感慨深げに台番号を見上げていた。

375番台。

そう、美菜子が生まれた日、同じように父はこの店のこの台でパチンコを打っていた。

開放台をクジ引きで当てて、500円で打ち止めにしたのだった。

その縁起を担いで美菜子と名付けた。

それから父は、事あるごとにこの台にこだわって、

これまでいくら損をしてきたことか。

というか、あの娘が生まれて来たこと自体が大損だった。

そう何度、思わされて来たことか。

その娘が結婚。

しかも文句の付けようのない相手と。

娘には山ほど文句はあるけど……。

時代が変わって現在の375番台はCR冬ソナ2。

「あー俺も記憶喪失になりてえ。

美菜子の記憶だけが全部、なくなったら、

明日の式も笑顔で出られるんだけどなあ」

などとぼやきながらも、画面一杯のペ・ヨンジュンの微笑みを見ては、

笑顔を作る練習をする父であった。

「母さん、ビールもらえるか」

ほどなくして家に帰った父は、居間に座ると晩酌をはじめた。

「お、帰ってたかオヤジ。

どれどれ、娘として最後のお酌をしてやろっじゃん」

「ほんとに最後だろうな。お前はすぐ帰って来そうでこわい」

「その可能性は否定できないね、きゃはは」

晩御飯のおかずを運んできた母親が、

「母さん、それだけはいやだからね。ご近所に恥ずかしいじゃない」と、会話に入った。

もう式まで半日とちょっと。2人とも覚悟を決めていた。

美菜子のシナリオに付き合うしか道はなかった。

「いまさら恥ずかしいかあ」

酒が入って、父親が開き直った。

「それもそうね」

母親だって本当のところ、娘がすぐ出戻ったって、いまさらなんてことなかった。

「ぎゃはは」

3人同時に大笑いし、田中家がいまここに結束した。

いい感じの空気になって、美菜子が機嫌よく口を開いた。

「じゃ、縁起もんだからさ、一応、あいさつするわな。

父さん、母さん、いままで育ててもらって……」

「だから、育ててねえって。お前は中学から自分で稼いでたじゃね

「か」

父親の突っ込みが炸裂した。

「ぎやははは」

またまた3人同時に大爆笑。

家族の結束がさらに高まる。

「あれだな、父さんと母さんは病弱な感じを出した方がいいな。

式のクライマックス、花束贈呈で母さんが倒れるか」

笑いをとって上機嫌の父親が、今度はボケた。

「ぎやはははは」

決して東大卒には聞かせられない冗談で、

大いに盛り上がる挙式前夜の田中家であった。

第13話 私のスキル

「しょうがないなあ。

とりあえず派遣社員にでもなつて、

働くかなあ」

パチスロで5万円やられちゃった帰り道、

私はファーストフード店の2階から、

ぼんやりと窓の外を眺め、

そうつぶやいていた。

一番安いハンバーガーしか注文できなくなってしまった

サイフの中身を考えるまでもなく、

ホントにもう働かないとマズイ。

パチスロで儲けて、

働かずに生きて行こうなんて、

やっぱり無理だったみたいだ。

窓の外には、ちょうど私鉄の駅の改札口が見え、

そこから続々と仕事帰りの社会人たちが吐き出されていた。

一番安いハンガーバーをかじりながら、

「やだなあ、満員電車…なんて言ってられないか…」と、

まわりに誰もいないのを承知で、

またつぶやいてみた。

こうして声を出す練習をしておかないと、

声の出し方を忘れてしまいそうだから。

そのくらい私は人と話していない。

半年前までは、私もこの時間、

改札口から吐き出される側の人間だった。

たいして大きくはなかったけど、

一応は新卒で食品メーカーに入社し、

OLをしていた。

そこで上司と不倫し、

2年ほど交際した後、

結婚を迫ったらあっさりと捨てられた。

ただいま26才、

独身、

無職のひとり暮らし。

なーんにもない。

部屋に戻り、ノートパソコンを開くと、

まず預金残高をチェックしてみた。

液晶モニターに映し出された金額は30万円とちょっと。

すぐ働いたとしても、

給料がもらえるのは早くて一ヶ月先だから、

その間の生活費や家賃を考えたら、

やっぱりギリギリだ。

これはマジで働かないと。

私は大手ポータルサイトの就職のページを開き、

派遣の仕事を探してみた。

あるわ、あるわ、

派遣の仕事なんて、

いくらでもある。

となると、今度は選ぶのが大変だ。

数千ある求人を絞り込むことにした。

まず、場所。

そりゃあ近いに越したことはない。

○○区、××区、 区でポン。

400に減った。

次は職種かあ。

なになに、事務・企画関連、

金融関連、

ソフトウェア関連、

インターネット関連、

クリエイティブ関連、

通信ネットワーク関連、

まだまだあるぞ、はあ…。

なにがしたいんだろ、私。

職種なんて、なんでもいいなあ。

ま、適当にコレとコレとコレにチェック。

次は業種？

ん？

職種と業種ってなにが違うの？

なんか職種と同じような言葉が並んでいるんですけど。

じゃ、コレとコレでいいか。

結局、10社くらいに絞り込めた。

ソリューションをどうのこうのっていう会社と

eラーニングがどうしたっていう会社と、

それから「アセット・マネージメント及びプロパティ・マネージメントにおける入出金の処理が主な仕事です」など。

もう全然意味分かんない。

どうしてカタカナばかりなの？

もしかして、これでみんなどんな仕事なのか分かつちゃうわけ？

不倫して捨てられた私にも務まる仕事？

ま、いいや。

振られるのには慣れているから、

全部、応募しちゃえ。

私は朝までかかって、

自分の履歴と経歴を打ち込み、

10社の求人にエントリーしてみた。

すると、翌日、朝から大変な騒ぎとなった。

ケータイが鳴る、鳴る。

「私、○○スタッフの××です。

このたびは 社の求人にエントリーいただきまして、

ありがとうございます。

早速ですが、

社にご紹介させていただくにあたって、

まずは当社までご足労願い、

ご登録していただくことになります。

いつこ来社が可能ですか？」

寝ぼけている私をいじめるかのような早口でまくしたてられ、

私は相手の言うままのスケジュールに

「はい」と返事をしていた。

なにはともあれ、私のケータイが鳴ったのは

ひと月前に母親がかけて来て以来だったので、

驚いたし、うれしかった。

が、午前中に5社、午後2社から電話が来て、

さらにメールでも3社から登録に來いとの連絡が入ると、

さすがにうれしいなどとは言ってもいられず、

私は混乱するばかりだった。

そして、途切れ途切れの睡眠から目覚めた夕方、

やっと正常に戻った頭でメモを整理してみると、

明日だけで5社も約束してしまっていた。

行けるわけがない。

ま、不倫相手からさんざん約束をすっぱかされ続けて傷ついた私が、約束をすっぱかすっていうのも悪くはない。

3社なら行けるから、2社はすっぱかそう。

私って悪女だわ。

とにかく、明日までに

写真付き履歴書と

経歴書を準備しなくちゃ。

あ、なに着て行こう？

やっぱ白いブラウスかな。

あ、髪もセットした方がいいかな。

今晚も忙しいぞ。

翌日の午前10時、

私は久しぶりにOLスーツを着て電車に乗り、

派遣会社に到着した。

んーなんかこういう緊張感久しぶり。

なんせ半年間、自堕落な生活を送っていたからなあ。

そうだ、私の人生の再スタートなんだ。

がんばろう。

とりあえず、不倫は辞めよう。

2畳ほどの個室に通されると、

そこには机がひとつと

その上にパソコンが1台。

電話と同じ早口で

登録の手順を説明した女性スタッフは、

「それではモニターに従って、

経歴を打ち込んでください」

と言って、部屋を出て行った。

なんだ、経歴書を持って来いっていうから、

徹夜して書いて来たのに、

またパソコンに打ち込むのかよ。

あほか。

で、次はなに？

スキル？

なんだそれ。

ああ、私になにができるかってことね。

OS？

えーと、私のパソコンはWindowsのMeだっけ。

アプリケーション？

ワードとエクセルかあ。

残念、できないわ。

一太郎も使ったことない。

ホームページ作成ソフト？

無理。

フォトショップにイラストレーター？

なんじゃそれ。

いっぱいソフトの名前が書いてあるけど、

私ってば、どれにもチェックできないじゃない。

私、パソコンでは

ネットとメールと

年賀状ソフトぐらいしか使ったことないもん。

次はなにをするのよ。

スキルチェック？

ウイルスチェックなら知っているけど。

もしかして試験？

この文章をパソコンに打ち込むわけ？

あ、ちょっと待って。

焦るじゃない。

あ、あ、もう始まっている。

あれ、間違えた。

うわ、指が動かない。

あらら。

私、グチメールを友達に打つ時、

自分でも驚くほど早いのに、

なにこの遅さ。

キーボードのストロークが合わないわよ。

あ、あ、あ、終了。

あー半分も打てなかったじゃない。

悔しい。

「それではお疲れ様でした。

これで登録は終了です。

またご連絡いたします」

ふー。

派遣の登録ってこんなに疲れるんだあ。

2時間びつしり緊張しっぱなしじゃない。

午後も2件、約束しちゃったけど、

この調子じゃ間違いなく倒れるわ。

午後の2件の派遣会社でも、

ほとんど同じように経歴を書かされ、

スキルチェックをされ、

クタクタになって私は自宅に戻った。

なんたる、この徒労感は。

すごい無駄なこととして疲れた感じ。

結局、スキルがなきゃダメってことよね。

スキルねえ。

私のスキルって、不倫以外なにあるんだろ？

あ、パチスロがあつた。

パチスロのスキルなら自信あるんだけど。

ソリューションは分からなくても、

ゲチエナ（１）なら分かるわよ。

ワードやエクセルはできないけど、

ビタ押し（２）はできるわ。

案の定、その後、

登録した派遣会社からは

「エントリーいただいた求人は

申し訳ありませんが、

他の人を推薦させていただくことになりました」

という断りのメールばかりが相次いだ。

ま、スキルチェックされた時点で、

こうなることは予想できたから、

別にショックではないけどね。

そんなことより

パチスロメーカーの求人探そうっと。

1 ゲチエナ パチスロの代表的なリーチ目。右リール下段にチエリー付き7停止の略。

2 ビタ押し パチスロで狙った絵柄を、狙ったところにビタッと停止させること。

第14話　すぐに揃うおばあちゃん

今年73歳になるおばあちゃんは

ちよつとボケている。

そしてそんなおばあちゃんを、

家族全員ちよつと疎ましく思っている。

ぼくの家は5人家族。

パチンコばかりしている大学生のぼくと、

コンパで男漁りするしか能のないOLの姉、

共働きの両親と

オヤジのお袋、

すなわちおばあちゃんだ。

家にいる時のおばあちゃんの楽しみはテレビだ。

2時間ドラマは欠かさずに見ているが、

困ったことにビデオの録画予約ができない。

というかビデオの仕組みを理解していないから

トンチンカンな要求が多い。

毎回、家族のだれかに頼むことになるが、

同じ時間帯の番組2つを同時に「録画しろ」とか、

昨日のテレビ欄を見ながら「この番組を録れ」とか。

「だからあ、もうおばあちゃんはッ!」。

忙しい時に頼まれると、

家族もつい語気が荒くなり、

そのたびにおばあちゃんは

「わかった、わかった」

と言っものの

一向にビデオの仕組みを理解しない。

携帯電話もそうだ。

一度、友達と山に路獲りに行って

迷子になってから一応、

携帯電話は持っているけど、

これも難しいようだ。

急な用事でかけても出たことはない。

で、時々、ぼくの携帯電話にかけてくるんだけど、

「あれ、なんで勇太が出るの、まったく。

裕子は？ 裕子に用事があるのに」

なんて調子だ。

ちなみに勇太がぼくで、裕子とはお袋だ。

一日中だれもない家にいてもつまらないので、

おばあちゃんとは毎日のように健康センターに行き、

そこで友達としゃべり、

カラオケを楽しみ、

夕飯を食べてから帰ってくる。

これが家族の一番の悩みのタネで、

おばあちゃんが帰ってくる時間は、

我が家も夕飯を終え、

一家団欒のひと時。

家族それぞれリビングで寛ぎ、

1日の疲れを癒している時間だ。

そこに帰ってきたおばあちゃんは、

いままで健康センターの宴会場で大声でしゃべり、

歌い、笑っていたもんだから、

そのテンションを引きずり、

それこそマシンガンのように

場の空気も読まずにしゃべりまくる。

その内容も毎日同じで、

「。。。さんのダンナさん、

肝臓が悪くて入院したんだって。

だって飲むんだもん。

でも、かわいそうだよ」

とか

「もう××さんはうるさい。

酒飲んで私の横に座って、

もうごちゃごちゃしゃべりっぱなしなんだよ。

私も最後には怒ってやったよ」

なんていう

家族のだれも興味を示さない話ばかりだ。

これが放っておくと、延々としゃべり続ける。

だから仕方なく、だれかが

「おばあちゃん、うるさい！ テレビ聞こえないよ、

もうその話は聞いた」

などと言って話を遮ることになる。

するとおばあちゃんは、

とても悲しそうな表情で自分の部屋に入っていく。

最近、おばあちゃんは

健康センターの一角にある

古いゲームコーナーで

パチンコをするようになった。

友達は夢中になって

3000円でも5000円でも使うそうだけど、

おばあちゃんは500円までと決めているらしい。

それが、自分でも驚くほどツイていて、

すぐに揃うんだそうだ。

この一週間、毎晩、その話題を

パチンコ好きのぼくにしてくるので、

ぼくは正直、うんざりしている。

ゲームコーナーのパチンコ機でも景品が取れるらしく、

おばあちゃんはおくに、

「勇太、お前、カップメン好きだろ。

おばあちゃんが取ってきてあげたから」

とうれしそうにビニール袋から

たくさんのカップメンを取り出しては、

パチンコの話始める。

もううんざりしているぼくは、

「そこ置いといて」とそっけなく言うと、

おばあちゃんを無視して、

自分の部屋に入ってしまう。

でも、次の日も、また次の日も、

おばあちゃんはおくに喜んでもらいたいのか、

カップメンを10個づつぐらい持って帰ってきた。

で、台所に山と積まれたカップメンを見て、

「あれ、どうしてこんなに同じモノがあるの。」

私が取ってくるから買っちゃだめだよ、勇太」

なんて言い出す始末。

自分が毎日、取って来ているのを覚えてないらしい。

さすがにぼくも、そんなおばあちゃんがいらしくて、

そんなこと滅多にないんだけど、

夜、おばあちゃんの部屋に行き、

話し相手になってあげた。

おばあちゃんは、「どうしたの?」と目を丸くし、

「いま2時間ドラマ見ているんだからさあ」

なんてちょっと迷惑ぶりながらも、

お茶を入れ、お菓子を出して、

いつもの健康センターの話始めた。

健康センターにはいろんな人生があるもんだ。

息子が自殺しちゃった老夫婦。

ダンナさんが事故で亡くなりめつきり老け込んだ奥さん。

娘が離婚し、孫3人の世話に追われ

体重が10キロも減ったおばあちゃん。

おばあちゃんの口から、

次から次へと不幸話が飛び出してくる。

「ホント、人生いろいろだよ。

でも、クヨクヨしててもしょうがないからさ。

おばあちゃんたちは、もう長くはないんだから、

好き勝手楽しもうってみんなで話しているんだ」

「おばあちゃんは、お前たち

かわいい孫2人とこつやつて暮らせて、

好きな健康センターに毎日行けて、

いまが一番幸せだよ」

いつもハイテンションでしゃべるおばあちゃんが

珍しくしみじみそう言った。

と思ったら、

「もう勇太のせいで、

ドラマちっとも見られなかったよ、まったく。

さ、もう寝るから出てってくれ」

と部屋を追い出された。

翌朝、ぼくはおばあちゃんに起こされた。

「勇太、お前、今日も大学に行かないで

パチンコするんだろ？」

私も連れて行って。

おばあちゃん、ホントすぐに揃うんだから」

おばあちゃんの言う通り、

ぼくはパチンコに行くつもりだったし、

おばあちゃんに行けばお小遣いをもらえるので、

ぼくはおばあちゃんを助手席に寄せ、

いつものパチンコ店に車を走らせた。

おばあちゃんは

「うわ、騒々しいねえ。

こんなところ長くいられない」

などと文句を言いながらも

「勇太、これこれ、

この魚が横に泳ぐ台だよ、

おばあちゃんが健康センターで

いつもやっているの」

と知っている台があったことに喜び、

ぼくと並んでその機種を打つことになった。

「ホント、ウソじゃないんだから。」

おばあちゃんすぐ揃っちゃうんだよ」

同じことを何度も言いながら、

おばあちゃんは打ち始め、

恐ろしいことにホントに

最初の500円で

おばあちゃんは確変を揃えた。

「ね、勇太。おばあちゃん、すごいだろ」

大喜びしてはしゃぐおばあちゃん。

確かにすごい。

その後、おばあちゃんは

3連チャン目で手が疲れたのだの、

目が痛いのだの、

腰が痛いなの、

トイレなの、

早く帰りたいだの言い始め、

でも確変が続いているから

もつたいないとぼくがなだめ、

代わりにぼくが打って、

結局8連チャン、

1万5000発出した。

ぼくは換金を勧めたが

おばあちゃんはお金じゃつまらないと、

全部、景品に交換した。

オヤジにネクタイ、

お袋にサイフ、

姉貴にはスカーフ。

そしてぼくには腕時計。

等価で6万円分の景品だから、

そこそこいい品物だ。

その晩、おばあちゃんは

食卓の主役になった。

オヤジもお袋も姉貴も

おばあちゃんからのプレゼントを喜び、

おばあちゃんは得意気に

延々とパチンコ自慢を繰り広げた。

でも翌日、今度はぼくがおばあちゃんを

パチンコに誘うと

「おばあちゃんがパチンコなんかに行くわけないだろ。

勇太！ お前もちつとは勉強しろ！ まったくもつ」

と怒り出し、

いそいそと健康センターに出かけて行った。

そしてまた、ゲームのパチンコで取った

抱えきれないほどのカップメンを

ぼくに手渡すのだった。

「勇太。おばあちゃん、すぐ揃っちゃうんだよ。

ホント、見せたいくらいだよ」

第15話 異性の胸の内

すっごくイイ女な私

へ？

居ないの？

まだ来てないの？

信じられない。

初めてのデートで待たせるなんて。

まったく人がちょっと合コンで愛想振りまいてやりやあ、

もうこの扱いかよ。

それより、なによ、この暑さは。

冗談じゃないわ。

こんな炎天下の道端で

いつまでわたしを待たせるつもり。

医者な俺

マジな。

最初のデートだっていうのに遅れちまったか。

ま、いいか、大体、医者狙いの女なんて

ロクなのがいないからな。

おれはまず職業から男を選ぶような女なんか信用しないもんね。

遅れたことでブーブー文句言ったら、

機嫌とって一発やってハイさよならだ。

今日の女は見た目だけはよかったからな。

すっごくイイ女な私

ウソ？

もう30分も遅刻じゃない。

倒れるわよ、わたし。

夕飯はちょっとやそつとのレストランじゃ承知しないからね。

どうせ、オープンカーかなんかに乗ってきて

「遅れてゴメン。ちょっと急な手術が入っちゃって」

とかなんとか言い訳するんですよ。

つたく、医者だと思っていい気にならないでよね。

「ごめん、ごめん、待った？」

いやあ、急な手術が入ってさあ。

急いで来たんだけど」

（フン、医者好き女はこのセリフでイチコロだぜ）

「あ、いえ、わたしもいま来たところで…」

（なに、カロリーラ？

わたしをカロリーラで迎えに来たの？

こいつホントに医者？)

「じゃ、乗って。

お台場の方にも行ってみようか」

(お台場行って海見て、

酒飲ませて夜景見せれば

股を開く、と)

「は、はい」

(げ。こんなクルマでお台場？

友達に会ったらどうするわけ)

「あっちゃゝ。混んでるね。

全然進まないや。どうしようかな。

お台場やめて、横浜の方にも行こうか」

(ま、海が見えればどこでも一緒だ)

「ええ、わたしはどこでも。」

それにしても大変ですね。

お休みの日でも急に手術が入ったりして」

（横浜じゃ中華かあ。

このクソ暑いのに油っこいのはなあ）

「そうなんだよねえ。」

おちおちパチンコもできないよね。

確変中に呼び出されたりするから。あはは」

「パチンコとかされるんですか？」

（おいおい、パチンコなんかしてるのかよ、こいつは。

初めてのデートでパチンコの話なんか持ち出すなよな。

なるほど、わたしは庶民の遊びであるパチンコもする気さくな赤ひげさんってか。

残念ながらわたしはそんな話題じゃ打ち解けないわよ）

「あれ、パチンコするの？」

（ありゃ、バカなお嬢様気取りかと思ったら、

ちよつとは話せるのか）

「え、いえ、わたしは一度もやったことないんです。

なんかおもしろそうですよね。

でも、女性同士ではなかなか入りづらそうで」

（だからパチンコ話はいいて。

それより年収いくらあるの？

カロリーラなんか乗って）

「そっか、パチンコもしたことのないお嬢さんなんだあ。

興味あるならやってみる？

うんうん、結構おもしろいよ。

最近では女性向きのおしゃれな店も多いし」

（海見たってつままないから、

ほんじゃパチンコにでも連れていくか)

「お嬢さんなんて、そんな全然。

え、パチンコ？ あ、はい……」

(うそ、うそ、うそ、

あゝあ、とうとうパチンコかよ。

なんでパチンコなの？

こんな美女と初めてデートして。

もっと、わたしのこといろいろ知りたいでしょ？

いくらでも話があるじゃない。

普通はもっと機嫌を取るんじゃないの？

マズイな、このわたしが軽く見られている……)

「あー涼しい。やっぱり夏はパチンコだね。

じゃ、ここに座って。

カード買ってくるから、5000円ちょうだい」

「え？ あ、はい。ちょっと待って……」

（しょえゝ、初めてのデートで金出さすのかい、女に。

だめだ、この男は。

あーもうキレそう。

一体ここどこ？

どうやって帰ればいいの？

「やつぱギャンブルは自分のお金でやらないとね。

じゃないと楽しくないから。

じゃ、ここにカードを差し込んで、

で、ハンドルを握って打つ、と。

でね、ここに玉が入るとまわるから。

で、3つ同じ絵柄が並べばいいの。

ま、そんなに簡単には揃わないけどね。

じゃ、がんばって」

（大学出たての勤務医なんて給料安いんだよ。

人のパチンコ代まで出せるかって。

今日はこの後、夕飯代にホテル代もかかるんだし。

お、そうだ、パチンコで稼げばいいのか。

こりゃ。がんばろ）

「は…はい」

（なにをグダグダ楽しそうに説明してるのよ。

そんなこといくら初めてだって、見りゃ分かるって。

それより5000円痛いなあ。

医者狙いの合コンに出るために

自分を磨いてるOLはお金がないのよ。

いくらすると思ってるのよ、

今日着ているこのシャネル。

グッチのバックにティファニーのアクセサリ。

まさかこんな勝負服でパチンコするとは。

完全にわたしだけ浮いているじゃないの、ったく

「あ、ほらほら、これがスーパーリーチっていうやつ。

おおお、くるか、くるか、よし、こい、こい、

あーダメだったあ。あははは」

「あ、惜しかったね。もうちょっとだったのに」

（おい、医者。

いいのか、こんな美女を連れてパチンコなんかしてて。

なに、そんな思い切り楽しそうに笑ってるんだよ。

怒って帰るぞ、

いいのか、いいんだな。

もう5000円なくなるって）

「あーなくなっちゃった。

あと5000円づつやるつか。

じゃ、ぼく買って来てあげるから」

「すみません。じゃこれで」

（今月、最後の万札だよ、それ。

どうするのよ、

こうなったらなにがなんでも揃えてやる）

「お、いいね、その表情。

ヤル気になってきたね。

そこなくっちゃ。

ね、パチンコってけっこう熱くなるでしょ。あはは「

（おれもマジで揃えないと、

あと2万しかねーや。

飯食ったら、ホテル代足りねーぞ）

「あ、きた、ね、ね、これ、見て」

（冗談じゃねーぞ、医者。

パチンコなんかやらせやがって。

こっちは明日の昼食代がかかってるんだよ。

好きで熱くなってるんじゃないや。

絶対にこいよ！

「あ、ほんとだ、よし、ほら、

きた、きた、きた。

よし、きた！」

（クソ、そっちの台に座ればよかったなあ。

ま、いいか、最悪、

この女にホテル代払わせよう）

「きゃ〜。

ね、ね、どうするの？

どうすればいいの？

うれし〜」

（それより、これでいくらになるの？

7000円使っていくら儲かったの？

まだ足りないのか？）

「あはは、結局、

2人ともスッカラカンになっちゃったね。

あはは。

ま、たまにはこういうデートもいいか。

あはは。

あゝ腹減った。

ラーメンでも食って帰ろう」

（失敗したなあ。

でも、このコ、なかなかいいじゃん。

マジで付き合おうかな）

「うん、こんな楽しいデート初めて。

横浜っておいしいラーメン屋さん多いんですよね」

（なに笑ってるんだよ、医者。

もう最低。

1万5000円どうしてくれるんだよ！）

「また会ってくれるよね。

じゃ連絡するから。

おやすみ」

（この「性格いいや。うん、惚れた」

「気をつけて帰ってくださいね。

おやすみなさい」

（事故って

てめえの病院にでも

担ぎ込まれる、

ばっきやーろ！
(

第16話 ゲームオーバー

「なっち。今日も元気してた」

「あ、サトシさん、こんばんは」

「今日も会いに来てくれたんだ。うれしー！」

「なっちはライブチャットの女の」

「うん。なっちとこうして夜、話すの

「俺のなかではもう日課になってる。なっちは？」

「うそ。うれしー。」

「もちろん、なっちもサトシさんが来てくれるの

「心待ちにしてるんだよ、いつも。」

「だって、ほかの人ってみんなエッチなんだもん。

「お仕事だから仕方ないけど、

「なっち、イヤでイヤで。」

サトシさん、そういうお話しないでしょ」

ライブチャットとは生映像付きのチャットのことだ。

「そんなことないよ。」

なっちのこと、いろいろ知りたいし。

それに俺も男だからさ」

「えー、サトシさんもエッチなの？」

でも、なっちサトシさんならいいよ。

ちよっとくらいエッチなお話しても」

「ほんと？」

じゃ、ちよっとだけ下着見せて。

あはは、うそっそ」

「それはお話じゃないでしょ。」

もう、サトシさんったら。

でも、今日は最後に『褒美として

ちよつとだけ見せちゃおうかな、なっち」

「やった〜。なっち、サイコー！」

有料のライブチャット・サイトに行くと、

そこに女のコの画像付きリストがあり、

気に入った女のコと自由に話ができる。

同時に女のコのチャットしている生の姿も

モニターに映し出されるので、

まあ一方通行のテレビ電話みたいなものかな。

もちろん、女のコは全員、いわゆるさくら。

というか、テレクラや出会い系のように

さくらであることを隠してないから、

厳密にはさくらとは違う。

お仕事だ。

女のコにとっては、

自宅に居ながらにして高収入が得られるとあって、
なかなか人気の職業らしい。

「で、サトシさん、今日もパチンコ勝ったの？」

「勝った、勝った。」

なつちと話すようになってから全勝だよ。

今日は10連チャンしてプラス5万かな」

「すごい。」

いいなあ、そんなに毎日、稼げて」

「でも、なつちと話して

ほとんど使っちゃってるよ。

俺、こうやって話しながら

1分100円も取られているんだから」

「えー、ウソ。そんなに高いんだ。」

有料だっていうのは知ってたけど、

まさかそんなに高いなんて。

ごめんね。

なっち、なんにも知らないで、

いつももつともつと長くお話してなんて、

お願いばかりして。

悪いから、もう切ってもいいよ」

「違う、違う。」

そんな意味で言ったんじゃないよ。

俺、ずっとなっちと話していたんだから。

そんな悲しいこと言わないでさ。

そうだ、なっちは今日、なにをしてたの？」

「なっちはずっとこのお仕事。」

だって、がんばってお金稼がないと」

「そっか。偉いよなあ、なっちは」

最初は俺も、エッチ目的で

ライブチャット・サイトの会員になった。

ライブチャットの楽しみは、

結局のところ女のコとエッチな話をして、

いかに脱がせるか、

さらには女のコをソノ気にさせて

テレフォン・セックスに持ち込めるか、だ。

実際、女のコによってはバンバン脱ぐし、

かなりきわどいことも平気でやってくれる。

でも、なっちは違った。

なんていうか、スレていないんだ。

こんな仕事をしているってことに恥じらいがあって、

ホント、普通の20歳の女って感じだった。

俺、そこに参っちゃったんだよね。

それから俺は毎晩、なっちと話した。

何度か話すうちにお互い打ち解け、

なっちは俺だけに

いろいろプライベートなことまで

話してくれるようになったんだ。

「なっち、お父さんの顔、知らないの。」

なっちが物心ついた頃には

もう病気で死んじゃってたから。

それからお母さんひとりで、

がんばってなっちと妹を育ててくれたんだ。

だからお母さんの負担を減らしたくて、

なっち、このお仕事、がんばってるんだけど、

家にお金たくさん入れると、

逆に心配されるでしょ。

へんなことしてないかって。

それでお金じゃなくて、

なっちが買い物して夕飯作ったりしているの。

今日の夕飯は肉じゃが。

へへ、ちょっと高い牛肉奮発しちゃった」

「なっちと違って、

妹、すごく成績がいいの。

だからなっち、どうしても妹を大学に入れてあげたくて、

それでエッチなお話もしなくちゃいけないこのお仕事、

イヤだけどやることにしたの……」

時には涙ぐみ、

時には無理して笑いながら

なっちは俺に話してくれた。

俺、こういう話に弱くってさ、

ウルウル来ちゃうんだよね。

それで、ますますなっちが好きになっていった。

「俺がこうやってなっちと話すことで、

なっちが夕飯のおかずを買ったり、

妹が大学行けるなら、

俺いくらでもなっちと話したい」

「サトシさん、ありがとう。」

ほんと、サトシさんってやさしいね。

なっち、サトシさんとはこんな形じゃなくて、

普通に知り合いたかったな……」

ななななっち。

もうこうなるとだめ。

頭ではなっちは仕事だと思っけていても、

俺だけは特別なんだと思っけてしまっ。

こっして俺はなっちに夢中になり、

いまに至っける。

でも、不思議だね。

恋愛パワーっていいのか、

とにかく俺はなっちに恋してハッピーだから、

仕事も順調なら好きなパチンコも快調そのもの。

もうなっちと話すために

かれこれ100万近くライブチャット代に使っちゃったけど、

いいんだ、いいんだ、

なっちがお金貯めてこの仕事をやめれば、

そのときは普通の恋人同士のように会えるんだから。

それまでは、ほかの男と少しでもエッチな会話しなくて済むように

俺が守ってやるんだ。

結局、今日も夜10時から夜中の3時まで

5時間もなっちと話した。

3万円か。

ま、パチンコで5万も勝ったんだ、

気にしない、気にしない。

あ、それより最後に「ご褒美もらっつ」の忘れてた。

それにしても若いのになっちみたいに苦労している女の「っっているんだなあ。

それなのにグレたりせず、

なっちつて真っ直ぐに育って偉いよなあ。

俺なんか親の金で大学出て、

働き出して3年になるけど、

親に金渡したことなんか一度もないもんね。

きつといいお嫁さんになるよなあ、なっちは。

俺の……。

きゃははは。

それから毎晩、

俺はなっちとライブチャットでデートしつづけた。

そうなると当然の欲求として、

もっともっとなつちとの距離を縮めたくて、

「なつちのアドレス教えて」、

「1回、食事したいね」、

「会いたいよあ」

などといついつい言ってしまう。

なつちを困らせるのが分かっているが……。

「会員さんとそんなことしたら

このお仕事クビになっちゃう。

なつちだって、早くこのお仕事辞めて、

サトシさんとデートしたいよあ。

でも、いまはまだ無理なの。

ごめんね」

その夜、とうとう俺は前からずっと考えていたことを口にしてしまった。

「この仕事のなっちの取り分は40%でしょ。」

俺の払ったお金の60%はサイトが取ってるなんてもったいないよ。

俺、同じお金を払うなら、

直接会ってなっちに渡したい。

その方がなっちも早くこの仕事やめられるし」

俺の言葉に、モニターのなかのなっちは、

うずくまって泣いていた。

「里美く、やめんなよ、そのバイト。俺の小遣い、どうすんだよ」

「だってウザいやつがいるんだもん。」

いくらなんでも私に金、使い過ぎだよお。

おーこわ。

すぐ違うとこ探すからいいでしょ?」

「ならいいけどよお」

第17話 救命救急センター

あれ、絵柄がなかなか止まらないぞ。

どうしたんだ？

なんかヘン。

まわっている。

あ、あ、天井も……。

それから、オレはなににも覚えていない。

気がついたら診察室のベッドに寝かされ、点滴されていた。

ど、どうしたんだ、一体？

オレが意識を取り戻したことに気がついたのか、だれかが話しかけてきた。

「あー、よかった。気がついて。山本さん、心配したよお」

メガネをしていないと、まったく人の顔が判別できないオレは、とりあえずメガネを受け取って、顔にかけ、その声の主を見た。

「ああ、店長。どうしたの、オレ？」

「どうしたじゃないよお。まったく、心配かけて。うちの店で、バツタリ倒れるんだもん。焦った、焦った、あははは」

そうか、パチンコをしていたんだ。

そうしたら絵柄どころか、盤面も天井もまわりだして……。

その後、倒れたのか。

「大変だったんだから。頭を床に打ったからさあ。動かしちゃまずいっていうんで、そのままですぐに救急車を呼んだの。いやあ、店でお客が倒れるなんて初めてだから、もう気が動転しちゃってさ」

気のいい店長だから、さぞや慌てふためいて、ホントに心配してくれただろう。

いまもこうして、オレに付き添ってくれているし。

それにしても、救急車に乗ったのかあ。

残念だな、初体験なのに覚えてないや。

「で、ここはどこなの？」

「●●大学病院の救命救急センター」

「ぐああゝ、ぐぐぐああゝ」

な、なんだ、このうめき声は。

オレは、店長の顔を見て、目で、「これはなに？」という表情をした。

すると店長は、「なんか自殺未遂みたいだよ。山本さんのあとに、救急車で運ばれてきて、いま胃の洗浄をしているみたい」と声をひそめて教えてくれた。

「さつき、付き添いの友人が医者の説明していたの聞こえたんだけど、睡眠薬を飲んだみたい。『ちよつと苦しいよ』って、医者が言ってる、それからずっと、うめきっぱなし。よほど苦しいんだろうね、胃洗浄って」

「へー、で、どんな人？」

「まだ、若い女のコ。なんでも会社の寮住まいみたいだよ。それで同じ寮の人たちが発見して、救急車を呼んだみたい。だから、付き添いの人たち、なんにも事情は分からないって。ただ、テーブルの上に薬のビンがあつて、その女のコが倒れていたみたいだなあ。なんで、自殺なんかさあ。やっぱり男かねえ」

店長は、刑事ドラマで刑事に聞き込みされているアパートの隣りの部屋のおばさんみたいに、よどみなく要点を押さえ、そして自分の憶測まで加えて説明してくれた。

それにしても、周囲がシーンと静かだからか、ここに寝ていると、

廊下の声や隣りの治療室の声まで丸聞こえだ。

「そんなことより、山本さん、大丈夫？ どうしちゃったのよ、体調悪かったの今日？」

「え、あ、ああ。心配かけてすいません。飲んで、寝ないでそのまま開店に並んじやったんだよね。たぶん、それで」

「だめだよ、パチンコは体力勝負なんだからさあ。寝ないで来ちゃあ。今度、睡眠不足のお客さまは遊技お断りってプレート作るのかなあ、あはは」

睡眠不足だけじゃないんだよ、店長。

明日さ、カードの支払いが落ちるんだけど、金がないんだよ。

それで前の日に競馬でなんとかしようと勝負して負けて、

ヤケ酒食らって、

でも眠れなくて、

朝から今度はパチンコで勝負したんだよ。

明日までに10万円作ろうと思ってさ。

それなのに、朝一から出たり飲まれたりで全然、玉が増えないんだもん。

そのうち、なにかもがグルグル、オレの人生のようにまわりはじめて、

気がついたらこのザマだよ。

って、そんなことみつともなくて店長に言えないから、

「そうだね、これからは気をつけるよ」と言っておいた。

「うつうつ、うげえ、あああ、うわあ」

救命救急センターには、相変わらず女のコのすごいめき声が響き渡っていた。

ほどなく看護婦さんが来て、

「あ、気がついたんだ。あはは、うるさいもんね。ごめんね、休まらないよね」

と、やさしい笑顔でオレに話しかけ、

ぶらさがっている点滴のビンを確認して、

「あ、もうちょつとね。終わったら呼んでください」

と言って、部屋を出て行った。

いつ見てもナース服はイイ。

それから10分して、オレは点滴を外され、

受付カウンターに向かっていると、

向かいの部屋からお袋が出てきた。

「お袋も来たの？ 大丈夫だよ、心配いらない。ただの過労だつてさ」

「過労つて、なんでお前が疲れるんだよ。仕事もしてないのに」

いままで意識をなくしていた息子を責めるなつてば。まったく。

オレは店長にお礼を行つて帰つてもらい、

お袋と待合室の長椅子に腰掛けて、

名前を呼ばれるのを待つていた。

すると、血相を変えた40代の夫婦が飛び込んできて、

看護婦さんと一緒に走って、治療室の方へ消えて行った。

「あ、あの人の家族だ。ほら、わたしさあ、家族と間違えられちゃって。わたしも慌てていたから、『。。。さんの家族の方ですか？』って言われて、よく聞かずに『はい』って答えたのよ」

確かに、お袋は、オレが寝かされていた部屋の向かいの部屋から出て来た。

「そしたら先生の部屋に通されて、頭のレントゲン写真見ながら、『かなり危険な状態です』って。もうびっくりしてさあ。『そんなに息子は悪いんですか？』って聞いたら、先生も『む、息子？ あれ？』だって。その患者さんは70過ぎているらしいだね、あはは」

重苦しい待合室で、お袋の笑い声が響いた。

笑うなよ、こんなところで。

「そんなことがあったのかあ」

「もう、心臓が止まるかと思ったよ。『脳がこんなに小さくなっている』だって。たけしの脳、小さそうだし、あはは」

だから、ここで笑うなって。

それにしても、平日の夜9時の救命救急センターは、大忙しのよう

だった。

オレとお袋のほかに、待合室には3組がそれぞれかたまってヒソヒソ話をしているし、

自動ドアの向こうの玄関前には、タバコを吸っている人が4、5人いる。

そこにタクシーから妊婦さんが下りてきた。

小さな子供を2人連れて。

すぐにクルマ椅子が用意され、

「ご主人か、家族の方は？」、

「いえ、今晚は仕事で」

なんて会話をしながら子供と一緒に運ばれて行った。

なんというピリピリとした場所なんだろう。

一刻一秒を争う深刻な出来事が、

次々とここに集められてくる。

オレが知っているだけでも、

いま、ここで、2人の人間が生死の境をさまよい、

1人の生命が誕生しようとしている。

ここでは、すべてが時間との闘い。

いまが勝負。

それなのに、オレときたら、毎日、毎晩、パチンコして、

飲んで、時間の無駄遣いもいいところだな。

もっと、いましなきゃいけないことをちゃんとしないと。

なんて、珍しく殊勝なことを考えていると、

「たけし、診察代とりあえず1万円だつてさ。で、後から昼間にちゃんと清算するんだって、ほら1万ちょうだいよ」

「あ、いまないんだ、立て替えてよ」

「まったく、お前に貸して返ってきたためしがないんだから。30過ぎて1万円もないのかね、まったく情けない」

ひとり息子が意識不明で救急車で運ばれたっていうのに、もう責めないでくれよ、頼むから。

まわりにも丸聞こえなんだし、恥かしいじゃんか。

「つたく、1万くらい、オレだって……あ、ある、ある。」

「そうだ、玉が1万円くらいあるはずだ。お袋、何時？」

「え、10時半だけど」

「急がなきゃ、当日限りだ」

とりあえずオレのいましなきゃいけないことは、

パチンコ店に行って2箱分の玉を換金して、

それからこのお袋からどうにか10万円借りることか。

やっぱ、情けね。

第18話 29歳のPAIN

「萌子かあ。おめえ、今年の正月も帰ってくるんだか？」

「なにそれ？ 今年の正月もって。もってなによ？ 帰るわよ。帰っちゃ悪いわけ？ もう超むかつく。忙しいから切るよ。ガシャン」
まったく、母ちゃんったら。

普通、正月くらい帰って元気な顔見せろっていうのが親じゃない？
それを、“今年の正月も”だって。

そりゃあ、東京で一人暮らしをはじめて11年、毎年欠かさず盆と正月に帰ってイヤってほど元気な顔を見せてますよ、私は。

29歳にもなつて、1度も彼氏を紹介したり結婚を匂わせたりしたことなんてありませんよ。

だからって、そんな嫌味を言わなくても……。

私は萌子。

山形の高校を卒業後、保母さんめざして東京の短大に入学してはや11年。

恥ずかしながら彼氏いない歴29年の強者だ。

いや、自分で言うのもなんだけど、そんなにヘンじゃないのよ。

もちろん、美人とは言わないけど、まあ十人並み。

それでも短大時代には言い寄ってくる男の1人や2人はいたんだから。

でも、東京に来るときに散々、母さんから

「東京の男にだけは気をづけろ。おもちゃにされて泣ぐのやんだべ」

って言われていたから、

私、その頃はもう見る男がみんな狼に思えて、守り通しちゃったんだよね。

だめ、だめ、お嫁に行くまではなんちゃって、あはは。

相手も白けちゃったんだろうね。

イマドキそんなこと言う田舎娘いるのかみたいな。

で、まじめに短大出て、保母さんになって幼稚園に勤めはじめたら、

そこはもうまったくの女世界だから、出会いなんてゼロ。

とうとうこの歳まで男を知らないまま来ちゃったわよ。

最近じゃ、幼稚園の男の子だって、

「萌子ちえんちえと結婚したい」なんて言わなくなったもんね。

22、23の頃は、男の子が私を取り合いしたっていうのにさ。

あはは。

こりゃ、今年のクリスマスも幼稚園で園児に囲まれてクリスマス会やって、それで終わりかな。

あゝあ。

なんて諦めていた私に出会いがあった。

短大時代の友達と飲みに行つて、その彼氏の友人を紹介されたのだ。

これまで紹介された男性はみんなゲゲゲって感じで断ってきたんだけど、今回は合格。

私より3つ下なんだけど、とっても話しやすくて感じのいい男性だった。

向こうもすごく私のことを気に入ってくれたみたいで、

友達も「私たちはこれで消えるから、後は2人でどっか飲みに行けば」なんて勧めるから、

私達、それからおしゃれなダイニングバーに行つて、遅くまで飲ん

だんだ。

すっごい久しぶりに男の人と2人きりでお酒なんか飲んだから、

私、すごく酔ってしまって、

で、彼とのおしゃべりもすっごく楽しくって、

最後、私のアパートまで送ってもらって、

ほっぺにチュッなんてされちゃって、

私、ときめいちゃった。

バラ色っていうの？　なんか見るものすべてが昨日とは違っていて感じ。

朝起きても寒くなくて、ルンルン気分で化粧なんかも入念にしちゃって、

園児に「おはよー」って言う声も張りが違うんだなあ。

それからすぐに、彼から食事に誘われて、初めてのデート。

2人ともまだきこちないけど、

それはそれで彼の誠実さが感じられて

ますます好きになって行つた私。

なんちゃって、そもそも私が男の人に免疫がないから、

どうしたってきこちなくなっちゃうんだけど。

エヘヘ。

それから毎日、何通も彼からメールが来るようになって、

私も園児に隠れながら

「いまお昼ごはん中。お仕事忙しくてもちゃんと食べないとダメよ」

なんてメールを打つのが超うれしくて、

私、彼にのめりこんで行った。

やっぱり3つ年下っていうのがあるのかな。

甘えん坊の彼にあれこれ世話を焼く私っていう形ができつつあって、

それがまた私にはピッタリだって気がして、

とにかくますますバラ色になっていったの。

週末は、飲みに行ったり、ドライブしたり。

私の手作りのお弁当を彼ったら

「おいしい、おいしい」って喜んで食べてくれて、

もうハッピー、ハッピー。

こりゃ、今年のクリスマスイヴはひとりじゃないぞ。

うふふ。

思わず、うつとりしてしまう私。

そうそう、母ちゃんに電話しとかなきゃ。

今年の正月は帰らないかも知れないって。

あんな嫌味言われたもんなあ。

「今年は帰れない」って言ってやるうっと。

4回目のデートで、彼が迫ってきた時、

私、ドキドキしながら

「お願い。待って。来週のイヴにね。ね、私の部屋で。お料理いっぱい作って2人でイヴしょ」

ってめいっぱいブリッコして言っちゃった。

彼、ちょっとダダをこねたけど分かってくれた。

わあ、どうしよう。正直、初めてだから怖い。

そして運命のクリスマスイヴ当日。

どうしたことが、彼がなかなかやって来ない。

さっきからメール入れているのに返事もないし。

電話してみようつと。

「ガガガッー、ジャラジャラ、ガガガッー、あ、もしもし、ガガガッー、ツーッー……」

ん？

なに？

切れちゃった。

もう1回、かけてみよう。

「ガチャ。ジャラジャラ、ガガガッー、プチッ。ツーツー……」

ん？

切られた？

なんで？

これって、もしかしてパチンコ？

まさか……。

だってイヴよ、イヴ。

私、こんなに準備して……なのにアイツはパチンコ？

ウソよね、もう1回……。

「ただいま電源が入ってないか、電波の届かない……」

電源、切られた。

私はいま、なにが起きているのか、分からなかった。

分かりたくもなかった。

約束の時間はもう2時間も過ぎているのに。

私の部屋はすっかりクリスマス色に装飾されているのに。

テーブルの上にはケーキ、鶏のモモ、オードブル、サラダ、シャンパンが並び、

プレゼントも買っているのに。

あとはケーキのローソクに火を灯せば、

幸せいっぱい恋人たちのクリスマスがはじまるはずだったのに。

なのに、肝心の相手来ない……。

間違いない。

アイツはパチンコをしている。

私がこれほど楽しみにしていたイヴに、

アイツはいつだってできるパチンコをしている。

アイツにとって、私より、私と過ごすイヴより、パチンコの方が大事だっていうの？

だって、だって今晚、私をあげるって……。

私ってば、パチンコより落ちる女？

痛って。こりや痛てえわ。超まいったなあ。あはは……

29回目のクリスマスイヴ。

私は勝負パンツを脱ぎ捨て、シャンパンをがぶ飲みした。

テレビではイブ恒例のさんまの『明石家サンタ』が始まった。

何度も電話したが繋がらなかった。

いま私は、お正月を山形の実家で過ごしている。

去年、電話で母ちゃんに彼氏の存在を口走っちゃったばかりに、
父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、姉ちゃん、おじちゃん、おばちゃん、
ん、

みんな決まっ て私にこう言う。

「東京に、いい人いるんだべ。連れてこりゃええのに」

「結婚？　ありえない。縛られたくないしー。超めんどーっぽいじゃん」

この痛手は簡単には癒えそうもない。

第18話 29歳のPAIN（後書き）

今回からジャンルを『その他』から『コメディ』に変更させていただきます。たまにはシリアスな話も登場するかも知れませんが、大半がコメディになりそうなので。

それと、タイトルからパチンコを期待して読んでくださった方には、ここで頭を下げておきます。パチンコと言っても、ファンが喜ぶような専門的な内容ではなく、この程度のパチンコで、どうもすみません。

第19話 口走っちゃった？

「本部長、今日は9時から重役会議の後、羽田発11時の飛行機で福岡です。そこでブロック会議の後に、県内5店舗を視察して、夜8時から店長との食事会というご予定です」

私はスケジュール帳を見ながら、本部長の今日1日の予定をいつものようによどみなく読み上げた。

「今日もハードだねえ。はいはい、分かりましたよ」

本部長もいつものように、新聞各紙に目を通しながら、やれやれといった感じで返事を返した。

「あ、夜の食事会だけど……」

本部長の言わんとすることは百も承知。私は本部長の言葉を遮り、答えた。

「大丈夫です。本部長のお好きな水炊きのお店を予約してございませう」

「さすが、真理子ちゃん」

本部長が福岡に行ったら鶏の水炊きだ。

そんなこといちいち確認すんなって。

秘書歴12年の私を舐めんなよ！

私は本部長に一礼すると、パンプスのかかとをカツンと小気味よく鳴らして、ブランド物のタイトなスーツをまとった身体を180度回転させ、自分のデスクへと戻った。

さあ、今日も戦闘開始だ。

有能な秘書である私の気の抜けない1日ははじまる――。

「本部長、そろそろ重役会議のお時間です。資料はこちらにご用意してありますので」

「本部長、玄関前にクルマが着いております。急ぎませんと、首都高が渋滞している模様なので」

「本部長、ブロック会議での挨拶の原稿をご用意しておりますので、飛行機のなかで目を通しておいってください」

社長の弟というだけで全国に100店舗を有する大手エステチエーのナンバー2の座に座っている本部長を、陰で操っているとまでは言わないが、まがりなりにもナンバー2らしく見せているのは何を隠そう、この私だ。

私がいなければ、この男は何もできない。

ただボーツとしているだけの本部長を連れまわし、ブロック会議、営業所視察を終え、食事会まで無事にスケジュール通り終わらせた

私は、本部長がしつこく2次会に誘うのを体調がすぐれないと上手に断り、私は出張先での唯一の楽しみであるパチンコに向かった。

つまらない冗談に笑って見せて、歌いたくもないカラオケをデュエットさせられ、しまいにゃケツのひとつも触られる2次会なんか、だれが行くか。

そんなのよりパチンコだ、パチンコ。

九州のパチンコは熱いからねえ。

よし、今日も一丁、出しまくってやるぜ！

私に言わせれば、パチンコは運じゃなくて気合だ。

揃うんじゃないくて、揃えるんだ。

だから、ジャージやスエットなんか着て、死んだ目で惰性でダラダラやっているような人間は勝てない。

ボディースーツで身体を引き締め、背筋をシャンとして氣を送れば、機械ごときは人間の敵じゃない。

と私は思っている。

何事も勝たなければ気がすまない私は、こうしてパチンコも勝って来た。

だからこの理論は正しい。

そして今日も確変2回で当たり8回。

4万ちょい儲けて、「人生何事も勝たなきゃだぜ!」と、気分よく私はホテルに戻った。

部屋でノートパソコンを開いてメールのチェックをすると、高校時代の友人・久美からメールが着ていた。

狭いリビングに安っぽいけど一応7段あるお雛様が飾られ、その前で5歳になる娘をパチリと撮った画像付きで。

おお、上等じゃなか。また幸せ自慢かい。

自慢できるのが子供しかないのは分かるけど、年賀状で拝見したばかりなんですけど!

あれ?

いま私ってば、久美のこと羨ましく思っちゃった?

あ、確かに思った。

ってことは私は、いまの自分に満足していない……そんなバカな。

35歳で目黒に2LDKのマンション買って、年収も1000万を超えて、洋服やアクセサリーはブランド物ばかりで、おまけにパ

チンコも負け知らずの私の、一体どこに不満があるわけ？

なんか、自分で自分に腹が立ってきた。

飲むか。

私はルームサービスでワインとツマミを注文すると、スーツを脱ぎ捨て、シャワーを浴びて、気持ちをオフに切り替えた。

素肌にバスローブをまとい、ワインのコルクを開け、自分に「お疲れさん」だ。

そっかあ、今日は雛祭りなんだなあ。女の子のお祭りだ。

じゃあ、ちょっと飲んじゃいましょうか。

ひとりでお祭りっていうのも淋しいけど。

あ、淋しくない。淋しくないぞお。

少し白酒召されたかゝってね、

赤いお顔の真理子ちゃん、

なんちゃって。

あはは、大量に召されてますよーだ。

ほれ、見よ、この下腹部。

ボヨヨンだ。

しかし、よくこの肉がちゃんとあのスーツに入るもんだね。

我ながら、感心しちゃうよ。

がんばってるなあ、自分。

カッコイイ生き方してるよなあ。

男だつて、より取り見取り。

途切れたことなんかないんだからねーだ。

よーし、たまには真理子ちゃんから電話でもしてやるか。

喜ぶだろうなあ。

ん、電源が切れているだと。

まったく、お色気ムンムンの真理子女王様から直々のお電話だった
ゆーのに。

しょうがない。

じゃ、次だ。

なんで出ねーんだよ。

せっかく福岡からセクシーな声を聞かせてやるっていつてるのによお。

ま、しょうがない、私クラスになると2股、3股は当たり前だからね。

なんせ私は高嶺の花。わはは。

「……」

出るよ。

調子くるつなあ。

淋しいじゃねーかよ。

ん？

淋しい？

私、いま淋しいって口走っちゃった？

そんなわけないよね。

淋しくないもん。

そっか、3人ともいねーか。

まさか、女？

なあに、私を知った男が、レベルを下げてまでほかの女に走るわけがない。

そういう意味じゃ私と付き合った男って不幸よね。

がはは…。

寝らんないわ。

母さんに電話しよ。

「何時だと思っているのよ。まったく」

「別になんでもないけど、あそうそう、私の雛人形ってまだあるの？」

「なに急に。へんな子だねえ」

「いま福岡のホテルなんだけど、ロビーに雛人形あったから思い出しちゃって」

「もちろんあるよ。お前には言わなかったけど、母さん、実はお

前が東京に行つてからも毎年飾っていたんだよ」

「へ？」

「だって、私が子供の頃なんてお雛様なんてなかったからね。あれ、お前の初節句の時に、父さんに無理言つて買つてもらつた思い出の品なんだよ。父さん、かわいいお前のためにつて月賦で。母さんうれしくつて、貧乏だったけどこの人なら付いていけるって思つたんだよ、その時」

こんな夜に両親のちよつといい話かよ。

かー結婚してえー！

あ、いま私、結婚したいつて口走っちゃった？

第20話 まったく

仕事で疲れた身体をバスタブに沈めて、ほーッとひと息。

わたしの唯一の息抜きの時間だ。

男のくせに長湯なんだからと女房に嫌がられても、これだけは譲れない。

風呂から出れば、2人の子供は居間でドタバタと走り回り、座っているわたしにぶつかったり、肩に登ったりしてくる。

テレビも聞こえなければ、新聞も読めない。

それだけならまだしも、女房はあれこれと用事を言いつけるし、近所の奥さんとの出来事をぶつけてくる。

これがたまったもんじゃない。

わたしにだって会社でいろいろある。

でも、こうして黙って働いているじゃないか。

それを、さも自分だけがいろいろあって大変みたいに。

そりゃあ、わたしに余裕があるときなら、ウソでも笑顔で「それは大変だったね。エライね」と言っておげられないことはない。

でもね……………。

ふうー。

やめた、やめた。

せつかくの一番落ち着ける自分の時間にこんなことを考えるのは。

もっと、楽しいこと考えよ。

なんだろ、なんだろ、楽しいことって。

楽しいこと？

あれ、わたしは一体、いまなにが楽しいんだろ？

子供の頃は楽しいこと、いっぱいあったなあ。

遠足とか野球大会とかクリスマスにお正月。

遊園地に行く前の日なんかうれしくって、興奮してなかなか眠れなかったもんなあ。

それに引き換え、最近じゃ憂鬱で眠れないことばかりだ。

楽しいことかあ。

そっか、いまがその楽しい時間なんだった。

ひとりのバスタイムが楽しみか。

ずいぶんつまらない大人になったもんだよなあ。

はあー。

なんで、こんなになっちゃったんだろ？

若い頃は友達と遊んでいれば、とにかくなにやっても楽しかったなあ。

旅行、ドライブ、酒、恋愛。エッチも。

エッチかあ。

もうずいぶんとしてないけど、別にいまさら外で遊んでみたいとも思わないし。

もう歳かね。

40目前で枯れたか。

ふああー。

なんだろ？ この脱力感、無力感は。

なんにもしたくない。

こんなんじゃないことなんか浮かばないか。ハハハ。

結婚して、子供ができて、マンションを買って、ほかになにすればいいんだ？

生きる目標がないんだな、結局。

生きる目標かあ。

あれ、こんなこと昨日も風呂入りながら考えたなあ。

堂々巡りってやつか。

さてと、煮詰まったところでそろそろ、出るか。

女房もうるさいから。

「もう何時間入ってるのよ、まったく。」

早く子供たち寝かせて！

わたしは、まだまだやることたくさんあるんだから。

のんきに長湯していい身分なこと、まったく。

わたしもゆっくりとひとりで入りたいもんだわ、まったく。

いつも子供2人と一緒に、落ち着いて入ったことないんだから。

田中さんところも高橋さんところも、めぐちゃんのところも、たくくんのところも

みんなパパがお風呂入れてくれるんだってよ。

いいわね、まったく」

はいはいはい。

結婚してどのくらい経ってからだろうか。

女房は必ず言葉の語尾にまったくを付けるようになった。

まったく、いやになる。

わたしだって、ちゃんと6時や7時に帰って来られる仕事だったら、入れますよ。

というか、入れさせられてますよ、絶対。

仕方ないだろ、定時で終わってまっすぐ帰ってきてても8時過ぎなんだから。

あなたが子供とお風呂に入っている頃、わたしはすし詰め満員電車の中。

なんなら代わりましょうか？

どっちがストレスたまるか試してみる？

1時間立ちっ放しの満員電車と我が子と入るお風呂。

でも、そんなこと言うと、

「だからこんなに都心から離れた郊外のマンションはイヤだって反対したのよ、まったく。」

まわりに友達だってだれもないし。

でも、あんたのお給料じゃ、こんな田舎じゃなきゃ買えなかったから、わたしは泣く泣く諦めたんじゃない。

そんなこと言うなら都心のマンションに引っ越せるぐらい稼いでよ。まったく。」

と、待ってましたとばかりに溜まっているうつぶんが、堰を切ってわたしに襲い掛かってくるから言わないけど。

「さあ、寝よ、寝よ」

はしゃぎまわる子供2人を寝室に追い込み、

どうにかこうにか布団に入れて、

まだひとりじゃ淋しがつて寝られない下の子に添い寝していると、わたしもついウトウトと……。

「ちょっと、なに子供と一緒になつて寝てるのよ、まったく。

わたしがこんなに忙しくいろいろやつてゐるっていうのに。

いい気なもんね、まったく。

今日はちょっと話があるのよ。来て」

ん？ ふあ？ 話？

このまま朝まで寝かせてくれたら、どんなに幸せか。

でも、やっぱりそんなに甘くはなかった。

今日は一体どんな話だ。

どうせロクな話じゃないだろうけど。

胃が痛くなるような話だけは勘弁してほしいもんだ。

「クルマ来月、車検でしょ？」

この際だから新車を考えようと思っているのよね。

もう5年も乗ったし。

めぐちゃんのところもたくくんのところも新車のミニバンなのに、

わたしだけ古い軽じゃ恥ずかしいもの」

また、金のかかる話か。

新車？

そんな余裕、ウチにあるのか？

「でね、あんたのお小遣いなんだけど、

月2万でやってもらえないかなあ。

あとはなんとかわたしもがんばってやりくりするから」

がんばってやりくりするなら、

わたしの小遣いを減らす必要ないじゃないか。

いまだってわたしは付き合いの飲み会に出た翌日は、

昼飯代がなくて水飲んで我慢しているんだぞ。

タバコも止めたし。

風呂上りのビールだって発泡酒になり、500ml缶が350ml缶に減り、

それも毎晩から3日に1本になっているというのに。

大体、クルマなんて幼稚園の送り迎え専用なんだから、いまのまま
で十分だ。

それを、めぐちゃんとたくくんの家と張り合って、ミニバンにしな
くても。

「ママ、このマンションのローンが月10万でしょ。

それに子供たちの塾や習い事に5万だよ。

クルマはいま無理だよ」

「だから、わたしがなんとかするって言うてるでしょ、まったく。

わたしがなにか贅沢なこと望んだ？

マンションもこんな田舎で我慢して、

結婚してから海外も行っていないし、

ブランド物もなにひとつ買っていないわよ。

せめて人並みの生活くらいさせてよ、まったく。

あー、一緒になる人、間違えた！」

それはお互い様だよ。

一生懸命働いて、

どうしてわたしが月2万の小遣いで我慢しなくちゃならないんだ。

ふざけるな。

それから女房は延々とグチをこぼし続け、

わたしはミニバン購入と小遣い2万を吞まされた。

まあ、どうにかなるさ。

いままでもどうにかなってきたんだから。

そう思って自分を納得させようとしたが、

今回はどうにも納得ができない。

もう頭に来た。

わたしは、なんかちっぽけな反乱を起こしたくなった。

なにかしなければ気が治まらない。

風俗にでも行くか？

飲み倒してやるか？

それともギャンブルでパーツと擦ってやるか……。

考えた末、わたしは女房に残業で遅くなるとウソを付いて、

会社帰りにタバコを買ってパチンコをした。

閉店までタバコ吸いまくって、金も使いまくってやる。

あはは、使ってやった！

2万円きれいに使ってやった。

あーさっぱりした。

ざまあみろ、バーカ。

その帰り道、夜風に当たって冷静さを取り戻したわたしは、

バーカが自分だということにようやく気がついた。

あゝあ、これから当分、昼飯は水かあゝまったく……。

第21話 ばかっふるゝ大樹と美咲ゝ

「あん、もー5分の遅刻だぞ。大樹ゝっ」

「ごめん、ごめん。ちよつと出るの遅くなっちゃって。必死で走って来たんだけど。はあはあ」

「だゝめ、走ってクルマにでも轢かれたらどうするの？ 美咲に早く会いたい気持ちは分かるけど、大樹にもしものことがあつたら美咲生きていけないんだからね」

「分かつてるよ。ごめんね。気をつけるからさ。それより美咲、髪切った？」

「超うれしー！ 昨日、美容院でちよつと毛先を揃えてもらっただけなのに、やっぱり大樹は気付いてくれたんだあ。いままで5分の遅刻は帳消しにしてあげる。うふ」

恋は盲目というけど、最近、場所柄もわきまえずにイチヤイチヤ、ベタベタと2人の世界に浸りきるばかっふるのなんと多いことか。なにを隠そう、この大樹と美咲の大学生カップルも、そんなばかっふるな2人。

付き合って半年で、そのばかっふるぶりはいよいよ拍車がかかり、

お互い寝ても覚めても

「大樹」

「美咲」

とベッタベタ。

友達もみんな呆れて離れていってしまったが、

そんなことはお構いなしに、

大樹と美咲は、

2人のために世界はあるの状態を満喫しているのだった。

そんな2人の当面の夢は一緒に住むということ。

要するに同棲だ。

お互い実家に住んでいるため夜は離れ離れに引き裂かれる毎日。

駅のホームで、毎晩のごとくピッタリと抱擁し合い

「帰る、帰らない」

と1時間も2時間も涙、涙のメロドラマを繰り広げている2人にと
って、

同棲は当然の流れと言えるだろう。

いや、毎晩、そんな2人の不快極まりない姿を見せられる世間のみなさんのストレスを考えれば、

一刻も早くこんなばっぷるは同棲でもして外をうろちよろしないでもらいたいもの。

2人の世界は2人の世界でやってくれ。

というわけで、同棲計画を練り始めたものの、

デートで散財し尽くしているばっぷるに貯金などあるはずがない。

そこでおばかな大樹は考えた。

「美咲、パチンコで稼ごうか」

「え、てゆうか、大樹うまいの？」

「あんなものは運だよ。美咲はおれとずっと一緒にいたいんだろ？ おれも美咲と住みたい。その熱い思いさえあれば、神様がきつと味方してくれるって」

「てゆうか、美咲、大樹のこと信じてるし」

どちらか1人がおばかなだけでは、ばかっふるにはなれない。

大樹と美咲、2人揃ってばかっふるだ。

さて、『大樹と美咲の同棲資金をパチンコで稼ごうラブラブ計画』
初日。

「美咲、大切な日に遅れてごめんな。おれ、がんばって絶対に勝つから」

「うん、美咲もがんばる。ずっと念じているから。勝ちますように
って」

“がんばり”や“念”で勝てるならだれも苦労などしないが、

とにかく駅前のパチンコ店に入った大樹と美咲。

指と指を絡ませながら、2人並んで人とぶつかりぶつかり通路を歩き、

台の選択を始めた。

金髪で体格のいい大樹と同じく金髪でするといきつね目の美咲の2人には、

ぶつかってもだれも文句など言えない。

どっから見ても、関わり合いたくないオーラ出まくりの2人だった。

「お、柔道の台がある。これにしよう、美咲」

グラビアアイドルが柔道着を着た等身大のパネルを見つけた大樹が言った。

「あー、なんかやらしい。胸の谷間見て決めたでしょ、大樹？
どーせ、美咲はないですよ。谷間。フン」

確かに、柔道着に不自然なほど胸の谷間が強調されたパネルだ。

「そ、そんなことないよ、美咲。」

おれは美咲の胸、大好きだよ。

てゆうか、デカいのキライ。

はっかっぱいじゃん。

そうじゃなくて、ほら、おれ、高校までずっと柔道やってたからさ。

やっぱり柔道に愛着があつて、それで……」

「じゃ、いいよ。大樹がよければ。がんばってね」

おばかはくだらないことで怒るが、3歩歩けば忘れる。

「お、新台って書いてあるぞ。やっぱり、新台に限るよね、パチンコは」

「そうなの？　やっぱり大樹はなんでも新しい方が好きなの？　女も？」

「もう美咲、どうしたんだよお。」

いまはパチンコの話。

たくさん勝って、1日も早く一緒に住むんだろ？

新台の方が店も出すんだよ。

客に出るって思わせるために」

「そうなんだ。じゃ、よかったね、大樹。」

がんばってね。

美咲、こうやってずっと大樹の手を握りしめてるっ！」

「美咲、反対側に座って、握り締めるの左手にしてくれる。」

右手を握り締めちゃ、パチンコできないからさ」

「あ、ごめん。」

美咲ってば、いつも大樹の足手まといになってるね。

いいの？

大樹はこんな美咲でもいいの？」

「おれが選んで惚れた女は美咲だけだよ」

「大樹く」

目と目を見つめ合い、それから抱擁すること10分。

なかなかパチンコが始まらないばかりだった。

「あゝ美咲、パチンコってテレビで見たことあるかも」。

3つ揃えばいいんでしょう？」

「そうそう、あ、美咲、これ、これがリーチ。

念じて、念じて。

一緒に住めますように！」

「大樹、がんばれ！」

ノーマルリーチにそんなに期待する人もいないが、ばかりだったから仕方がない。

案の定、中央の絵柄はひとつずれて6で止まった。

「クッソー、6かよ。惜しかったなあ」

「なんで、5で止まらないんだろ。」

美咲の想い、神様に届かないのかなあ。グスン」

「み、美咲。まだ、始まったばかりだからさ。」

2人の熱い想いは、パチンコなんかには負けないさ」

それからノーマルリーチが10回ほど来たが、ことごとくはずれた。

「ムカツクなあ。期待させやがって」

「ほんと、超ムカツク。」

てゆうか、隣りのおじさん当たってるし」

「ま、最後にはおれと美咲の愛の力が勝つさ。」

焦らして焦らして最後にドカーン！

な、ラブストーリーってそうなのよ」

「もう、好き好き、大樹のそういう前向きなと」。

いまここで抱かれない」

台も無制限ならこの2人のおばか加減も無制限だ。

「お、美咲、なんか変わった。」

これ、スーパーリーチだ。

なんだなんだ。抑え込みに入ってたぞ」

「きゃ、美咲も抑え込まれた〜い」

「お、今度は背負い投げだ〜」

「もう背負って、背負って〜」

「巴投げはどうだ〜」

「あん、目がまわる〜好きにしてえ〜」

「美咲っ、お、おれ……………」

「大樹っ、み、美咲も……………」

あろうことかパチンコの液晶画面で発情してしまった大樹と美咲。

保留玉も使いかけのプリペイドカードもそのままに、

手と手を取ってラブホへ駆け出してしまった。

想像を絶するばかりだ。

どうなる？

『大樹と美咲の同棲資金をパチンコで稼ごうラブラブ計画』。

大丈夫か？

ニッポンの未来。

第22話 ばかっぶるゝ同棲編ゝ

「ねー大樹ゝ。

昨日、大家さんから電話が来てえ、

家賃3ヵ月もたまってるって怒られちゃったゝ。

どおしよあゝ」

「美咲のことを怒ったのか？

許せん。

俺がボコボコにしてきてやる」

「キヤー、頼もしいゝ。

って、それじゃここに住めなくなっちゃうでしょ、大樹。

悪いのは払わないこっちなんだしゝ」

「そっか。

さすが美咲は冷静だなあ。

そういうところ大好き！」

大学生の大樹と美咲は、周囲も呆れるほどのばかつぷる。

念願の同棲生活をスタートさせたものの、

どこに行くにも2人べったりくっついてないと気がすまない大樹と美咲は、

バイトもすぐにクビになり、

いつもお金に困っていた。

しかし、そこはばかつぷる。

金の切れ目が縁の切れ目なんていう世間の常識は通用せず、
相変わらず2人のために世界はあるの状態を満喫していた。

「で、聞いて聞いて、大樹〜。

私、駅前でスカウトされちゃったの〜。

すごいでしょ。

私、芸能界なんか興味ないし、

大樹のそばにいつも居たいけど、

でもお金のためにデビューしようと思うんだけど、

どう？」

ジャーンと効果音を入れながら、

大樹にスカウトマンの名刺を見せる美咲。

「あれ、これ芸能プロダクションじゃなくて

風俗じゃん」

キツネ目の美咲が芸能界にスカウトされるわけがない。

「なにそれ？」

「だから男がお金払って、

女にエッチなサービスをしてもらう店。

いろんなすごいことしなきゃいけないんだぞ」美咲「

「た、大樹っ！

なんでそんなことに詳しいのよ。

さては私に内緒で行ったことあるわね。

キーツ!!」

「ないよ、ないよ。

友達に聞いたの。

だから俺はよく分からない。

でも、美咲ならきつと人気になっちゃうよなあ。

こんなにかわいいんだもん。

AVとか出ちゃって、

いろんな雑誌に出て、

それから深夜番組なんかにも出て、

あー結局、芸能界デビューかあ。

俺の知らない遠い世界に行っちゃうなあ……」

そんなことより愛する美咲が風俗で働いてもいいのか？

大樹、論点がズレてるぞ！

「そうなの？

なんだ、やっぱり芸能界なんじゃない。

私、大樹とのこの生活を守るために、

やっぱり芸能界デビューするよ。

大樹、ひとりくらい私が食べさせてあげる」

さすがはばかつぶる。

論点のズレも気にせず、

会話はドンドン進んでいく。

「美咲。俺、うれしいよ」。

でも、その気持ちだけで十分だよ。

女に働かせたとあっちゃ俺の男がすたる。

芸能界より俺のそばにいる！」

「あ〜ん、男らしい〜。

大樹、好き〜」

結局、美咲の風俗デビューの話はなくなり、

ここでいつものラブラブ・チュッチュ。

同棲してから半年。

毎日、この行為が10回は繰り返されるのだから、

おばかは飽きないというか、

バイトをクビになるのは当然というか……。。

しかし、いくら愛の世界に逃げ込んだところで、

お金がないという現実の世界の問題は避けては通れない。

「なあ、美咲。

やっぱり俺たちにはパチンコしかないんじゃないか。

ほら、同棲する時もパチンコで稼いでこのアパート借りれたんだし。

家賃3カ月分24万。

パチンコで稼いじゃおうか」

「あーその手があったね、大樹。

さっすがー記憶力いい」

って、半年前のことだぞ、美咲。

半年前、

「2人の熱い想いさえあれば、

神様が味方してきつと出してくれる」

という大樹のノー天気な発案で、

パチンコに行った2人。

しっかり手を握り合って

1台のパチンコ台に気を送り込み、

見事、連日のバカ勝ちをおさめたのだった。

その額、50万円。

かくして2人は夢だった同棲生活を手に入れた。

さて、2匹目のドジョウを狙う大樹と美咲。

果たして、世の中そんなに甘いのか？

「半年振りだよね。懐かし〜ね、大樹」

お互い腰に手をまわして、

びったりくっついて通路を歩くと、

まわりの客は明らかに不快な表情となった。

が、筋金入りのばかつぶるは、

そんなまわりの空気を読む力が

もともと欠如しているので問題ない。

「あれ、美咲。」

この前やった台なくなってる。

てゆーか、魚のばっかりだ」

「ほんとだね、大樹。」

てゆーか、美咲、小さい頃、水族館好きだったし」

「あ、俺も俺も。」

海ガメなんかサイコー」

「キヤー、うそ。」

美咲と一緒にじゃーん。

やっぱ、子供の頃から気が合ってたんだ」

とろろんとした瞳で大樹を見つめる美咲。

もちろん大樹も美咲の瞳を見つめ、

2人の“熱い想い”は沸騰寸前だ。

「じゃ、やるよ、美咲。」

2人が世間の汚い大人どもに

引き裂かれるかどうかの瀬戸際なんだから、

死ぬ気で気を送ってくれ」

「うん、大樹。」

美咲、大樹と離れるくらいならホントに死んじゃうから……」

「俺だって、美咲と離れるくらいなら死んだ方がマシだよ……」

「た、大樹……今日、勝てなかったら一緒に

死のうね。

ぐすん」

「ああ、でも勝つから心配するな。」

美咲にもっとたくさん幸せをあげるから」

「あああ、大樹」。

ダメだよ、こんなところで美咲を

泣かせちゃ。

え〜ん、え〜ん」

いいから早く、パチンコしろよ！

「大樹と美咲の好きな海ガメさん、揃うといいね」

「うん。海ガメだと3だから確変だからな」

大樹の左手を拝むように両手でぐっと握り締め、

「あ〜海ガメさんだ〜」、

「キャ〜、泡が出た〜」、

「なにこの水着の女〜、大樹、見ちゃだめ〜」

と、とにかく1回1回うるさいことこのうえない美咲。

命がかかっているわりには楽しそうだから、

ばかっふるはやっぱり計り知れない。

が、3000円のカードがなくなったところで、

大樹ががつくりと肩を落とした。

「大樹、どうしたの？」

まだはじめたばかりじゃん」

「いや、もうお金がないんだよ。

美咲。

死のうか」

つか、命がけの勝負が3000円かい！

「待って、大樹。

美咲、大樹のこと好きだから死なせたくない。

風俗で働くよ、美咲。

大樹のこと好きだから」

「やだ。」

美咲が人気者になって、遠くに行っちゃっ……」

だからそんな問題じゃないってば。

「美咲、絶対に雑誌とか出ないから。」

ならいいでしょ」

「う、うん」

いいんかい！

「でも、俺、美咲がいない部屋に」

ひとりでいられない」

「じゃ、美咲のお客さんになれば。」

あ、いい考えかも。

美咲がお金もらったら、

そのお金で大樹が

美咲のお客さんになるの」

「うんうん。

それいい。

風俗ってお金いっぱいもらえるらしいから、

家賃払っても

俺が風俗で遊ぶくらいもらえるよ、きっと」

「じゃ、大樹、

開店から閉店までずっとお客さんになって〜。

そうすれば美咲、大樹とだけエッチしてれば

お金もらえるじゃん。

超ラッキー！。

早く、行こ、行こ。

さっきからエッチしたかったんだ」

ばっかぷる、恐るべし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4757e/>

ようこそパチンコへ

2010年10月12日01時15分発行